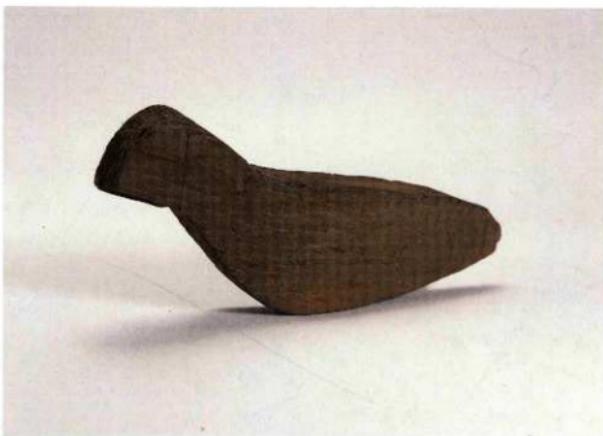


壹丁田遺跡 (2次調査)

都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2008

出雲市教育委員会

壱丁田遺跡

(2次調査)

都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

出雲市教育委員会

発刊にあたって

壱丁田遺跡は、都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業に伴う試掘調査によって、1995年に発見されました。そして、発掘調査（1次調査）を実施し、古墳時代から近世に至るまでの人々の生活の跡が埋もれていることがわかつていました。

今回、1次調査の北に延びる街路事業が計画され、平成16年～18年の3か年にわたり2回目の発掘調査を実施しました。

壱丁田遺跡は『出雲国風土記』に記載されている「神門水海」の東沿岸に位置します。今回の調査では、少量ではありますが縄文後期の中津式土器が出土し、当遺跡が所在する地域が、縄文時代後期前半から生活可能な地域であったことがわかりました。そして、弥生時代にも生活が営まれていることもわかつてきました。

特に、弥生時代中期の鳥形木製品やほぼ完形の無頸壺、奈良時代の水切り瓦など出雲平野の歴史を考える上で重要な発見がありました。

神門水海や神戸川は、中世頃までは壱丁田遺跡のすぐ近くにあり、生活に大いにかかわる存在であったと思われます。壱丁田遺跡の調査により出雲の長い歴史の中の一端を明らかにすることができました。

最後に、発掘調査に協力していただいた関係者に厚く感謝し、この報告書が広く各方面で利用されることを望みます。そして、この調査成果を積極的に活用していきたいと思います。

平成20年3月31日

出雲市教育委員会

教育長 黒目俊作

例　　言

- この報告書は島根県出雲市白枝町543番地外に所在する壺丁田遺跡の発掘調査報告書である。2004～2006年度にかけて発掘調査、整理作業を行い、2007年度に報告書作成を行った。
- 壺丁田遺跡は既に3次調査まで行われている。本書は未刊行であった2次調査の報告である。1次と3次調査については既に報告書は刊行済みである。
出雲市教育委員会編1998『壺丁田遺跡発掘調査報告書』出雲市駅前白枝線街路事業地内
出雲市教育委員会編2006『壺丁田遺跡第3次発掘調査報告書』出雲市白枝北土地区画整理
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

- 発掘調査は、下記の期間において実施した。

調査期間	調査箇所	調査面積	調査担当者
平成16年9月3日～平成16年10月5日	1-1区	150m ²	高橋
平成17年10月11日～平成17年10月31日	1-2区	300m ²	坂本
平成18年1月17日～平成18年3月20日	1-3区	500m ²	坂本
平成16年11月1日～平成17年2月18日	2区	600m ²	高橋
平成16年10月5日～平成16年11月18日	3区	330m ²	高橋
平成19年2月1日～平成19年3月9日	4区	120m ²	坂根

- 調査は、次の組織で行った。

調査指導　島根県教育庁文化財課

平成16年度

事務局　板倉 優（出雲市文化企画部芸術文化振興課長）

川上 稔（出雲市文化企画部芸術文化振興課文化財室長）

調査員　高橋智也（出雲市文化企画部芸術文化振興課文化財室 副主任）

調査補助員　櫻井康行（出雲市文化企画部芸術文化振興課文化財室 臨時職員）

現場作業員　飯塚俊男、三嶋文子、板垣裕子、須山林吉、飯塚丈夫、前島利輝、
小玉順子、春岡文夫、上代 勇、長島節子、花田和子

室内整理　岩崎晶美

平成17年度

事務局　神門 勉（出雲市文化観光部文化財課長）

川上 稔（出雲市文化観光部文化財課 主査）

調査員　坂本豊治（出雲市文化観光部文化財課 主事）

調査補助員　錦田充子（出雲市文化観光部文化財課 臨時職員）

現場作業員　青木 孝、安食 勉、公田悦郎、小玉順子、佐野静枝、稻村玉枝、
岡元義文、金森光雄、妹尾裕、高根豊、高橋イキ子、塚原立之、渡部政義

室内整理	深津光子、糸賀伸文
平成18年度	
事務局	石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）
調査員	花谷 浩（出雲市文化観光部文化財課 学芸調整官）
調査補助員	遠藤正樹（出雲市文化観光部文化財課 主事）
現場作業員	坂根健悦（出雲市文化観光部文化財課 嘴託員）
現場作業員	勝部真紀（出雲市文化観光部文化財課 臨時職員）
室内整理	青木 孝、今岡春義、金森光雄、星野篤志、岩谷幹夫、板垣将信、 影山嘉一、土肥源市、児玉達也
室内整理	永田節子
平成19年度	
事務局	石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）
調査員	花谷 浩（出雲市文化観光部文化財課 学芸調整官）
調査補助員	坂本豊治（出雲市文化観光部文化財課 主事）
現場作業員	坂根健悦（出雲市文化観光部文化財課 嘴託員）
室内整理	山口智子（出雲市文化観光部文化財課 臨時職員）
室内整理	中島和恵、飯国陽子、妹尾順子

5. 調査にあたっては、地元の方々から多大な協力を賜った。記して謝意を表します。
 また、現地調査及び報告書作成にあたって次の方々から有益なご指導、ご助言を頂いた。
 山田康弘(島根大学)、杉本和樹(西大寺フォト)、錦田剛志(島根県立博物館)、角田徳幸(島根県埋蔵文化財調査センター)、守岡正司(島根県埋蔵文化財調査センター)、渡辺正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)
6. 掛図に使用した方位は真北を示し、座標は世界測地系に基づいたものである。
7. 造構、遺物の実測は、調査員、調査補助員が行った。現地写真撮影は各担当調査員が行った。遺物写真撮影は坂本が主に行い、一部は杉本和樹(西大寺フォト)に依頼した。
 須恵器の実測図は断面を黒くした。
8. 自然科学分析は文化財調査コンサルタント株式会社に、木製品保存処理及び樹種同定は株式会社吉田生物研究所に委託し、原稿を掲載した。
9. 本書の編集と執筆は、高橋、坂根と協議し、坂本が行った。
10. 本報告書掲載遺物、実測図および、写真は出雲市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 位置と環境	1
第1節 壱丁田遺跡の位置	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査に至る経緯	3
第3章 調査の成果	5
第1節 1-1区の調査	
第2節 1-2・3区の調査	
第3節 4区の調査	
第4節 2区の調査	
第5節 3区の調査	
第4章 総括	61
第1節 繩文後期～弥生前期	
第2節 弥生時代中期後半から近世	
第3節 壱丁田遺跡の評価	
第5章 自然科学分析編	65
第1節 出雲市壹丁田遺跡出土木製品の樹種調査結果	
第2節 壱丁田遺跡発掘調査に係る花粉分析及びAMS年代測定	

挿図目次

図1 老丁田遺跡と周辺の遺跡	2	図29 2区土層断面図(1)	35
図2 老丁田遺跡の調査区	4	図30 2区土層断面図(2)	36
図3 1-1区出土遺物実測図	5	図31 2区遺構実測図	37
図4 1-1区調査区実測図	6	図32 2区石組遺構実測図	38
図5 1-2・3区調査区実測図	8	図33 2区遺構出土遺物実測図	40
図6 1-2区SK01実測図	9	図34 2区SD05出土遺物実測図	41
図7 1-3区5層木製品出土状況	9	図35 2区3層出土遺物実測図	42
図8 1-3区4層出土遺物実測図	10	図36 2区4-1層出土遺物実測図(1)	43
図9 1-3区5層出土遺物実測図(1)	11	図37 2区4-1層出土遺物実測図(2)	46
図10 1-3区5層出土遺物実測図(2)	12	図38 2区4-1層出土遺物実測図(3)	47
図11 1-3区5層出土遺物実測図(3)	13	図39 2区4-1層出土遺物実測図(4)	48
図12 1-3区5層出土遺物実測図(4)	14	図40 2区4-1層出土遺物実測図(5)	49
図13 1-3区5層出土遺物実測図(5)	15	図41 2区4-1層出土遺物実測図(6)	50
図14 1-3区5層出土遺物実測図(6)	16	図42 2区4-2層出土遺物実測図(1)	52
図15 4区調査区実測図	18	図43 2区4-2層出土遺物実測図(2)	53
図16 4区土層断面図	19	図44 2区4-2層出土遺物実測図(3)	54
図17 4区SE01実測図・出土遺物実測図	20	図45 2区4-2層出土遺物実測図(4)	55
図18 4区2層出土遺物実測図	21	図46 2区6層出土遺物実測図	56
図19 4区4層出土遺物実測図(1)	22	図47 3区遺構実測図	58
図20 4区4層出土遺物実測図(2)	23	図48 3区調査区実測図	59
図21 4区4層出土遺物実測図(3)	24	図49 旧河道実測図	61
図22 4区4層出土遺物実測図(4)	25	図50 SD02実測図	62
図23 4区4層出土遺物実測図(5)	26	図51 遺跡の位置(出雲平野の等高線図)	67
図24 4区4層出土遺物実測図(6)	27	図52 試料採取地点の位置	67
図25 4区4層出土遺物実測図(7)	28	図53 №1地点の花粉ダイアグラム	70
図26 4区4層出土遺物実測図(8)	29	図54 №2地点の花粉ダイアグラム	70
図27 4区4層出土遺物実測図(9)	30	図55 №3地点の花粉ダイアグラム	71
図28 2区調査区実測図	33		

表目次

表1 出雲市老丁田遺跡出土木製品同定表	66
表2 AMS年代測定結果	69
表3 微化石概査結果	69

図版目次

- | | |
|-----------------|------------------|
| 図版1 カラー図版 | 図版14 1区出土遺物 |
| 図版2 1-3区調査状況 | 図版15 1-3区・4区出土遺物 |
| 図版3 1-3区調査状況 | 図版16 4区出土遺物 |
| 図版4 1区調査状況 | 図版17 4区出土遺物 |
| 図版5 1-3区木製品出土状況 | 図版18 2区・4区出土遺物 |
| 図版6 4区調査状況 | 図版19 2区出土遺物 |
| 図版7 4区調査状況 | 図版20 2区出土遺物 |
| 図版8 4区調査状況 | 図版21 2区出土遺物 |
| 図版9 2区調査状況 | 図版22 2区出土遺物 |
| 図版10 2区調査状況 | 図版23 2区出土遺物 |
| 図版11 2区調査状況 | 図版24 2区出土遺物 |
| 図版12 3区調査状況 | 図版25 2区出土遺物 |
| 図版13 3区調査状況 | 図版26 木材樹種 |

第1章 位置と環境

第1節 壱丁田遺跡の位置

壹丁田遺跡が所在する地籍は、島根県出雲市白枝町543番地外である（図1）。遺跡の所在する出雲市は出雲平野と北の島根半島北山山系、南の中国山地からなる。出雲平野の西側の日本海沿岸部には砂丘が南北に伸びている。

壹丁田遺跡は神戸川による南北方向の微高地上に位置している。その西側には『出雲國風土記』に記載のある「かんどのみちうら神門水海」が広がっていたと考えられ、壹丁田遺跡はその沿岸に位置する。

第2節 歴史的環境

縄文時代

現在、出雲平野で知られている早期末の遺跡として、出雲平野西部の上長浜貝塚や菱根遺跡がある。続く前期末～中期では、斐川町の上ヶ谷遺跡が確認されているのみである。その後の海退が進んだ後晩期の遺跡が近年の発掘調査によってわかってきてている。三田谷I遺跡、矢野遺跡、原山遺跡、出雲大社境内遺跡などがあげられ、集落の増加がみられるが遺構の確認数は少ない。このころ、壹丁田遺跡でも人の営みが始まっている。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡は縄文晩期から続き、特に三田谷I遺跡、矢野遺跡で多くの遺物が出土している。

中期から後期にかけては入海周辺の集落が飛躍的に増大し、天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡などの大規模集落が出現する。これらの遺跡は集落に多重の溝を配置するものがみられ、平野で生活する上で水の処理が大きな問題であったことがわかる。

出雲平野の南東の丘陵地には青銅器大量埋納で知られる神庭荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡があり、出雲の各集落がまとまっての共同体祭祀が行われたと考えられる。

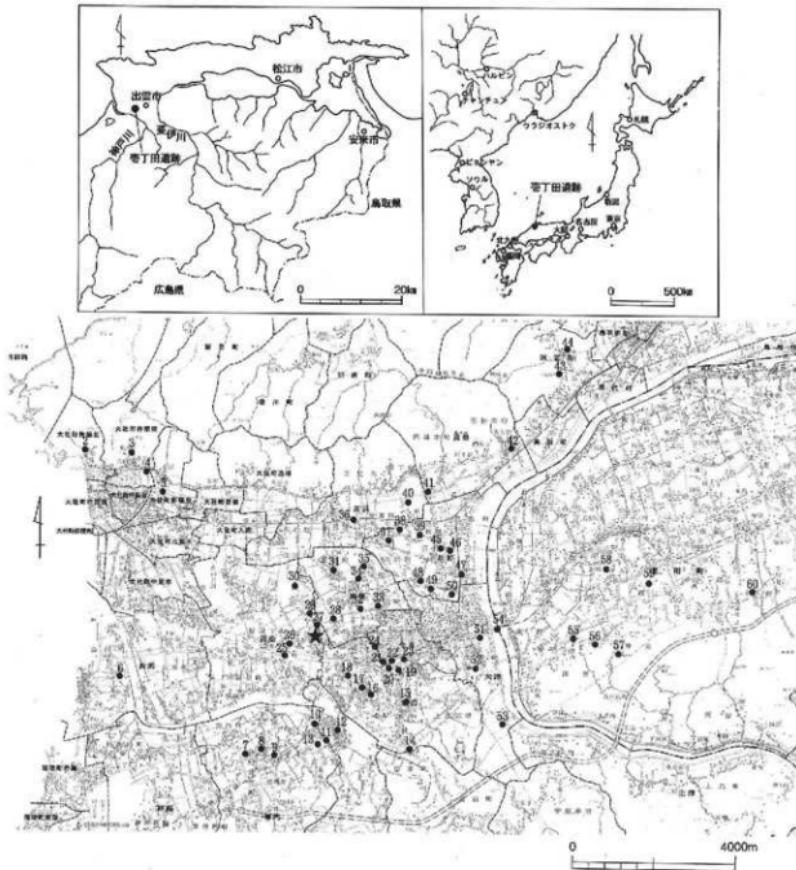
墓は、前期の配石墓で知られる原山遺跡、中期中葉の貼石墓である中野美保2号墓、中期末頃の四隅突出型墳丘墓である青木4号墓、そして、弥生後期後葉～終末にかけての大規模な四隅突出型墳丘墓で知られる西谷墳墓群がある。

古墳時代

古墳時代になると弥生時代の大規模集落が急激に衰退するといわれてきたが、近年の発掘調査では、古墳時代前期～中期の遺構・遺物の出土が増えつつある。

前期の古墳としては、景初三年銘鏡が出土した神原神社古墳、前方後円墳の大寺古墳や筒形銅器が出土した山地古墳が知られている。中期の古墳としては北光寺古墳、池田古墳、西谷11号墓、軍原古墳、神庭岩船山古墳があげられる。

後期後半以降になると、今市大念寺古墳、上塙治築山古墳などの出雲地方最大級の横穴式石



- | | | | | |
|---------------|-------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 壱丁田遺跡 | 2. 稲佐遺跡 | 3. 出雲大社境内遺跡 | 4. 五反配遺跡 | 5. 里山遺跡 |
| 6. 上長浜貝塚 | 7. 観知寺付近遺跡 | 8. 知井宮多聞院遺跡 | 9. 芦渡遺跡 | 10. 弘法寺參道前遺跡 |
| 11. 田畠遺跡 | 12. 古志本郷遺跡 | 13. 下古志遺跡 | 14. 三田谷I遺跡 | 15. 笠山遺跡 |
| 16. 神門寺境内廬寺遺跡 | 17. 高西遺跡 | 18. 天神遺跡 | 19. 善行寺遺跡 | 20. 藤ヶ森南遺跡 |
| 21. 角田遺跡 | 22. 藤ヶ森II遺跡 | 23. 藤ヶ森I遺跡 | 24. 海上遺跡 | 25. 小余路遺跡 |
| 26. 白枝本郷遺跡 | 27. 小畑遺跡 | 28. 波根冲遺跡 | 29. 白枝荒神遺跡 | 30. 井原遺跡 |
| 31. 矢野遺跡 | 32. 蔵小路西遺跡 | 33. 姫原西遺跡 | 34. 小山第3遺跡 | 35. 大塚遺跡 |
| 36. 高浜駅周辺遺跡 | 37. 高岡遺跡 | 38. 稲岡II遺跡 | 39. 稲岡I遺跡 | 40. 里方別所遺跡 |
| 41. 山特川川岸遺跡 | 42. 青木遺跡 | 43. 上烏坂 | 44. 中村1号墳 | 45. 萩杼II遺跡 |
| 46. 萩杼古墓 | 47. 宮谷遺跡 | 48. 中野西遺跡 | 49. 中野美保遺跡 | 50. 中野清水遺跡 |
| 51. 石上手遺跡 | 52. 西谷塙蒸群 | 53. 長劍遺跡 | 54. 斐伊川鉄橋遺跡 | 55. 後谷V遺跡 |
| 56. 小野遺跡 | 57. 水室IV遺跡 | 58. 平野I遺跡 | 59. 杉沢III遺跡 | 60. 神庭荒神谷遺跡 |

図1 壱丁田遺跡と周辺の遺跡 (1: 120,000)

室を有する大古墳が築造される。また、南の丘陵には上塙治横穴墓群、神門横穴墓群などの大規模な横穴墓群も築かれる。

奈良時代・平安時代

官衙施設の関連と考えられる遺跡として、古志本郷遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、犬神遺跡、後谷遺跡、鹿藏山遺跡、青木遺跡などがあげられる。また、仏教関連遺跡として、神門寺境内庵寺、長者原庵寺、天寺平庵寺、などの古代寺院が建造される。そして、石櫃をもつ光明寺3号墓や小坂古墳などの初期火葬墓が神戸川周辺で多く見られる。

中世

矢野遺跡では14～15世紀の溝や屋敷跡が発見されている。また、蔵小路西遺跡では周囲を溝に囲まれた約1haの規模を有する12世紀後半～15世紀の館跡が発見された。隣接して二木氏館跡が存在しており、「中世朝山家惣領家」の居館である可能性が指摘されている。寺院関連の遺跡としては大井谷Ⅱ遺跡、城跡としては、鳶ヶ巣城、大廻城、大井谷城、半分城などが構築されている。中世についても発掘調査によって徐々にわかってきてている。

第2章 調査に至る経緯

平成15年（2003）10月、出雲市都市整備部都市計画課より都市計画道路事業「出雲市駅前白枝線」予定地における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地の南側（国道9号線の南側）では、平成7年に宅丁山遺跡（1次調査）の埋蔵文化財発掘調査が実施されている。この発掘調査も、同じ「出雲市駅前白枝線」に伴うものであった。したがって、国道9号線の北側に遺跡が広がる可能性もあるため、事業予定地内で重機による試掘調査を行った。

試掘調査は、平成15年11月11日、12月24日に計13か所で実施した。試掘調査の結果、6か所で遺構、遺物を確認した。

本調査（宅丁山遺跡2次調査）は、事業予定地内を6区画にわけ、用地買収が終わった部分から順次行った。発掘面積2000m²。調査期間は、平成16年9月～平成19年3月まで行い、平成19年度に発掘調査報告書を作成した。

ちょうど同じ頃の平成17年に、2次調査の北西側で、出雲市白枝北上地区画区整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施されている（宅丁山遺跡3次調査）。

以上のように、当遺跡は3次にわたり調査が行われている。図2の宅丁山遺跡の調査区配置図をみると、1次調査のE区と2次調査の1-1区、2次調査の4区と3区の間に調査が行われていない部分がある。これは、試掘調査の際、遺構・遺物が確認されていない部分である。よって、宅丁山遺跡は1次調査地点、3区を除く2次調査地点、2次調査の3区と3次調査地点の大きく3地点に分かれている。3地点間の空白地には水田などが存在した可能性が考えられる。

【参考文献】

出雲市教育委員会編1998『老丁田遺跡発掘調査報告書』出雲市駅前白枝線街路事業地内
出雲市教育委員会編2006『老丁田遺跡第3次発掘調査報告書』出雲市白枝北土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

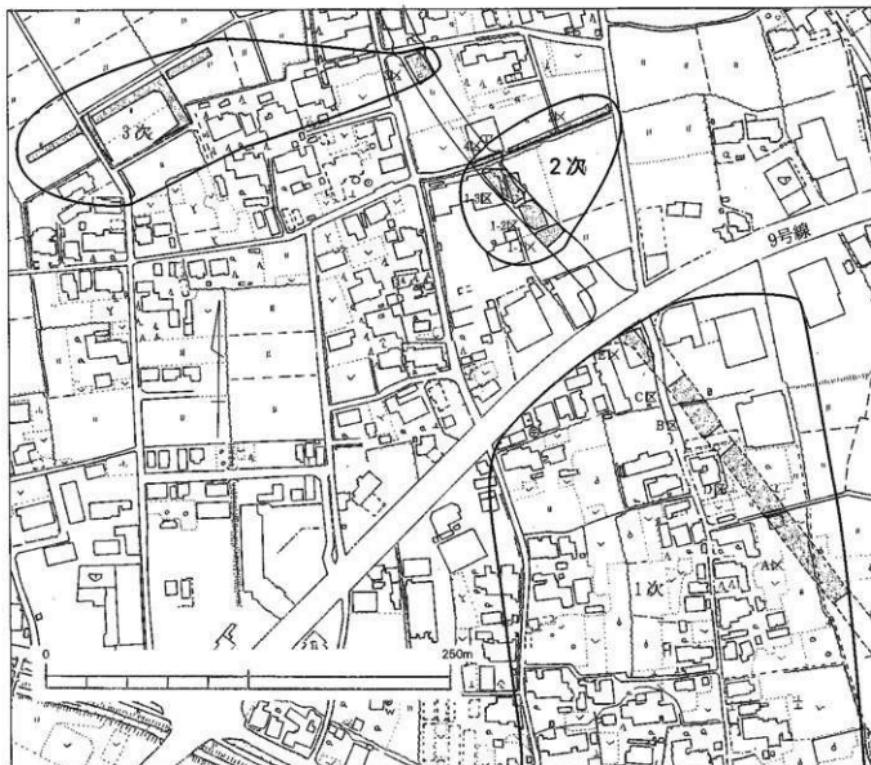


図2 老丁田遺跡の調査区（1:3000）

第3章 調査の成果

第1節 1-1区の調査

1-1区は東西15m、南北長辺12m、短辺7mの調査区で、2次調査の西端に位置する。

1 土層堆積状況（図4）

基本層序は、上から、表土、耕作土（2層）、粘質土（3層）、粘砂土（4層）、粗砂（6層）である。これらの堆積に人為的な状況は認められず、ほぼ自然に堆積したものであろう。

3層上面までを重機で掘削したのち人力で3層を掘り下げた。3層中からコンテナ1/3箱分の遺物が出土した。大半は中近世の土師器・須恵器と考えられる。胎土の様子から弥生土器と推定できるものも含まれている。どの遺物も風化が激しい。

4層に遺構が存在する可能性もあったため、3層を除去した後に遺構検出を試みたが、水の噴出が非常に激しく検出することは困難であり、遺構の有無については不明である。

なお、これ以下については、湧水が激しいことから調査を行うことを断念した。

2 3層出土遺物（図3・図版14）

3層からは、弥生石器、土鍤、土器、擂鉢が出上した。1は扁平片刃石斧の刃部の破片である。残存長5.4cm、幅5.1cm、厚さ1.9cmを測る。身が厚く、大形品である。横断面形は長方形に近いが、ややふくらみをもつ。弥生時代中期頃のものであろう。2は球形の土鍤である。全長3.8cm、孔径1.2cmを測る。3と4は土師器の皿である。3は底径約4.6cmを測る。4は底径約5cmを測る。5は須恵質の擂鉢である。

3まとめ

調査の結果、3層から若干であるが弥生時代中期から中世にかけての遺物が出土した。しかし、遺構は確認されていない。このことから、当調査区は2次調査地点の南側縁辺部に位置すると考えられ、1次調査地点との間に約100m以上の空白地が生じることがわかる。

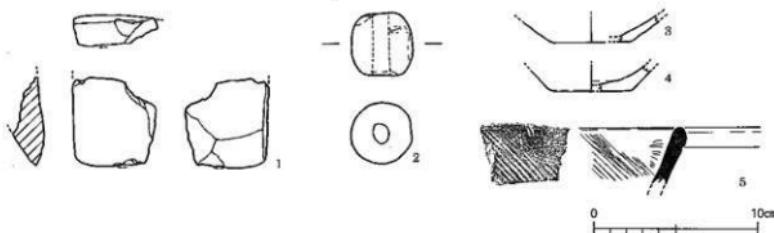


図3 1-1区 出土遺物実測図（1:3）

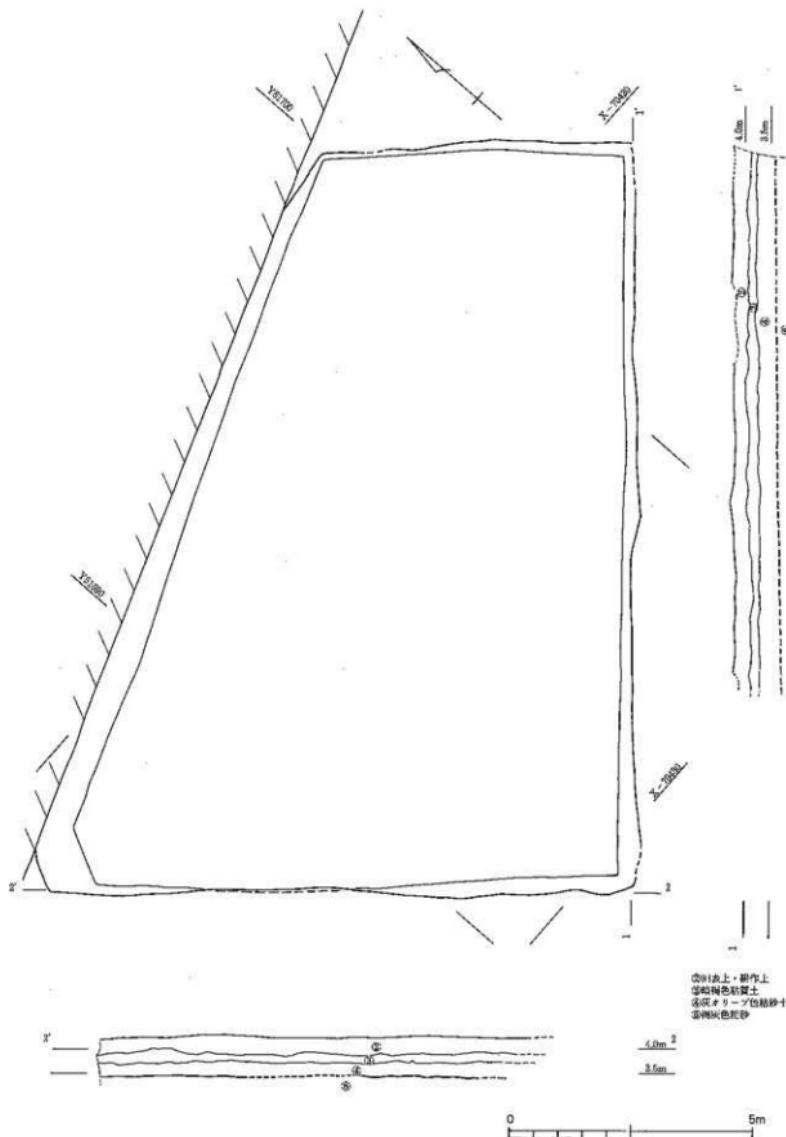


図4 1-1区 調査区実測図 (1:100)

第2節 1-2・3区の調査

1-2区は1-1区の北側に位置し、さらにその北側に1-3区がある。1-2区は最大で南北25m、東西16mを測り、調査面積は約300m²。1-3区は最大で南北25m、東西16mを測る。調査面積は約500m²。

1 土層堆積状況（図5・図版3）

基本層序として、上から、造成土（1層）、旧表土・耕作土（2層）、粘質土（3層）、粘砂土（4層）、粘質土（5層）、粗砂（6層）が確認された。5層は、2次調査の1-2区、1-3区のみで確認した層である。

重機により造成土と2層までを掘削し、3層から人力で調査を実施した。3層には遺構はなく、近世の遺物が少量出土したにとどまる。

2 遺構

（1）旧河道（図5、図7・図版2、3、4）

4層～5層は旧河川の堆積層で6層の粗砂が河川の基盤層である。1-2区で左岸を確認し、4区で右岸を確認している。したがって、1-3区は旧河道の中に位置する。旧河道は幅50m、深さ1.2mである。最下層の5層から弥生中期後葉の土器が集中して出土することから、この時期に「神門水海」に注いでいたと考えられる。5層からは土器の他に木製品も出土している。木製品には、建築部材や杭、鳥形木製品がある。杭は6層に打ち込まれた状態で出土したが、位置関係は整然としたものではない。ただ、その杭があるために他の木製品がこの地点に溜まっていると考えられる。

5層から出土した遺物は、1-3区の北側に集中していることから、弥生中期の集落が北側あるいは、北東側にあると推定できる。

弥生中期後葉以降、旧河道がどのような過程やどのくらいの時間をかけて埋没したかは不明である。ただ、4層によって、旧河道が完全に埋まったのは確かである。4層からは、弥生時代中期～奈良時代頃の遺物が少量出土している。

（2）土坑

SK01（図6・図版4）

4層上面で、1基の上坑SK01を確認した。楕円形の土坑であるが、性格は不明である。2つの遺構が重複しているのかもしれないが、平面では確認できなかった。遺物は出土していない。埋土が3層に近いので、近世に掘りこまれたものであろう。

3 出土遺物

遺物は1-2区より1-3区で多く出土した。1-2区の遺物は小片で実測図は掲載していない。ここでは、1-3区4層と1-3区5層出土遺物を掲載する。

（1）1-3区4層出土遺物（図8・図版14）

6～9は弥生土器の壺形土器である。6は口縁部から胴部にかけての破片で、口径約

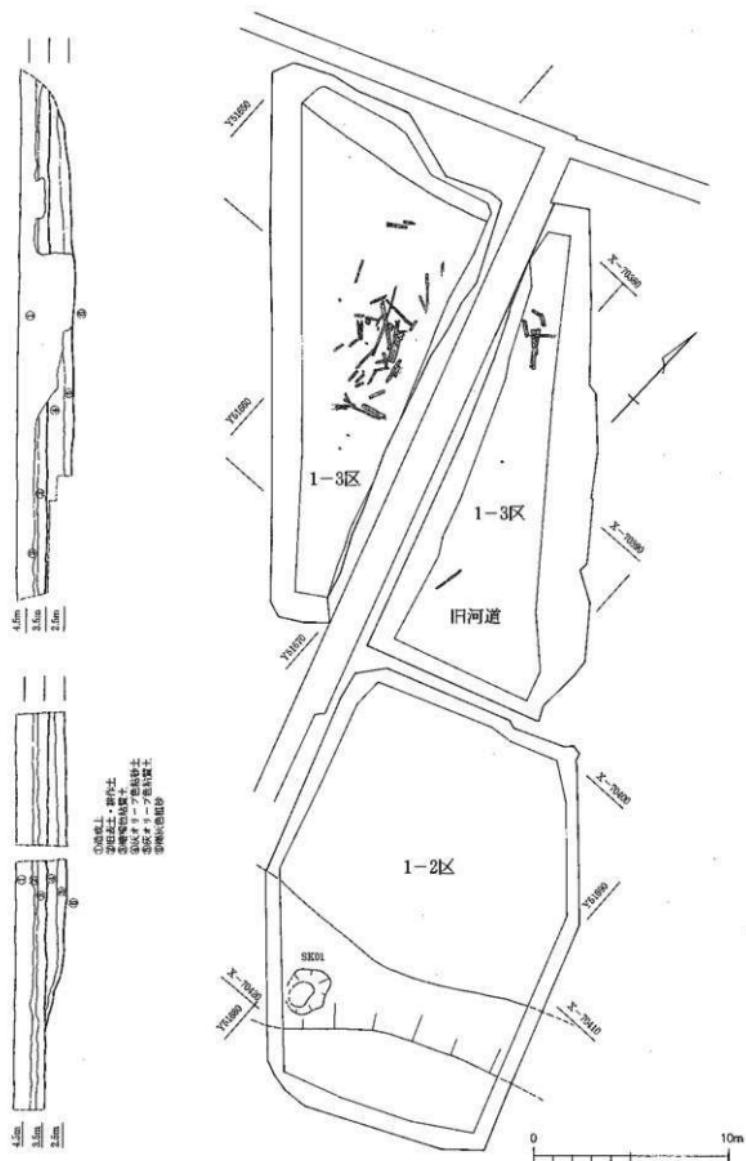


図5 1-2・3区 調査区実測図(1:250)

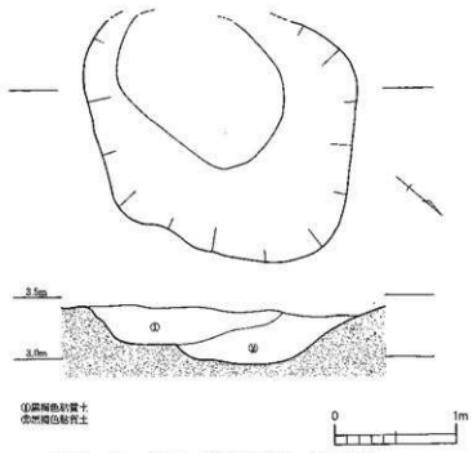


図6 1-2区 SK01実測図 (1:40)

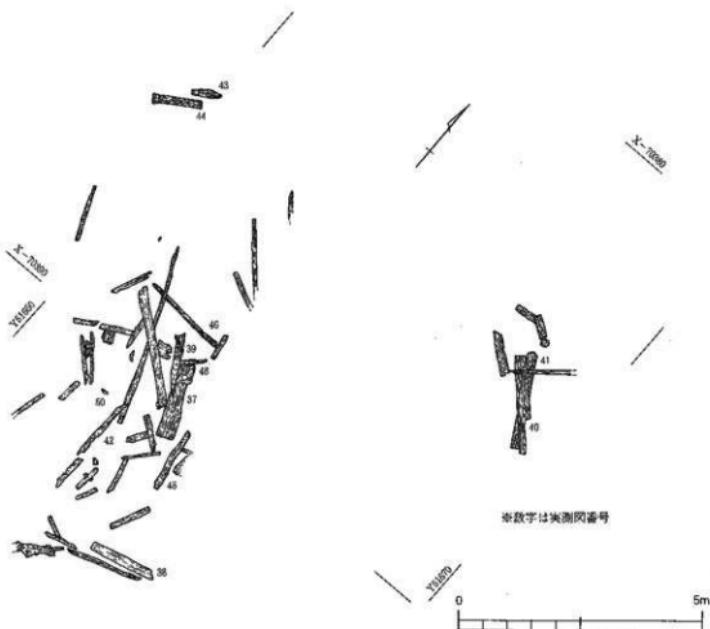


図7 1-3区 5層 木製品出土状況 (1:100)

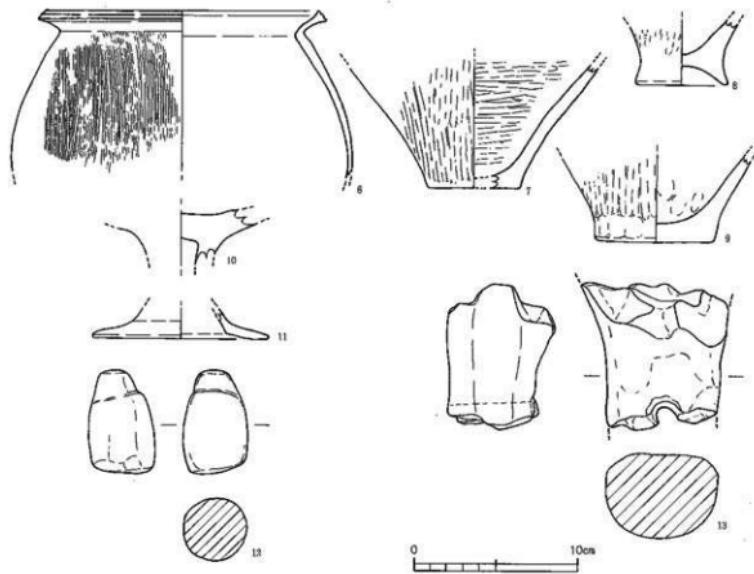


図8 1-3区 4層 出土遺物実測図 (1:3)

17.4cmを測る。胴部上半はそれほど張っていない。口縁端部は上下に肥厚し、2条の凹線文が巡る。外面にはハケメが施されていて、煤が多く付着している。弥生時代中期後葉と考えられる。

7～9は壺か壺の底部でくびれて立ち上がる。7は平底で底径約5.6cmを測る。内外面ともにミガキが施されている。8は上げ底で底径約5.6cmを測る。外面にミガキがほどこしてある。9は平底で底径約7.3cmを測る。外面にミガキ、内面に指頭圧痕が残る。7～9は弥生時代中期頃と考えられる。

10・11は高坏の破片である。10は坏と脚の接合部である。器面は磨滅が著しい。11は筒部からほぼ真横に開く脚部片で、脚径約10.6cmを測る。10・11は古墳時代中期から後期頃と考えられる。

12は用途不明の磨製石製品である。全長6.6cm、幅3.9cmを測る。棒状であるが、片方の端部がくびれて細くなっている。横断面は円形である。

13は土製支脚の破片で、上部と下部が破損している。貫通した円形の孔がある。13は古墳時代～奈良時代頃と考えられる。

(2) 1-3区 5層出土遺物 (図9、10・図版14、15)

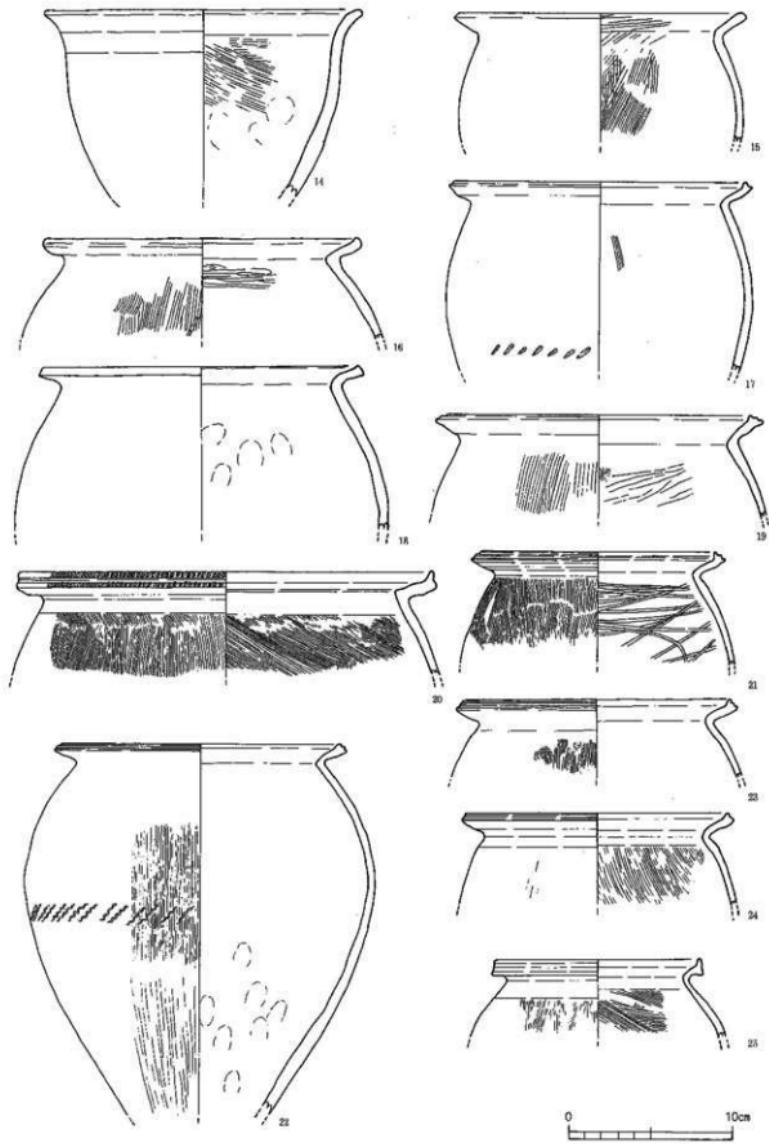


図9 1-3区 5層 出土遺物実測図(1) (1:3)

5層出土遺物は、その多くが調査区の北西側で出土している。

14は弥生時代前期の變形土器である。口縁部断面が如意形をなし、口径約19.5cmを測る。口縁部外面に段や沈線はない。

15～35は弥生時代中期中葉から後期初頭にかけての土器である。15は變形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片で、口径約17.2cmを測る。屈曲部は「く」字状をなし、口縁端部は横ナデが施されている。胴部最大径は口径より小さい。16～18、20は變形土器で、口縁端部が指ナデによりつまみあげられたものである。16、18、19は口径より胴部最大径が大きい。19・21～30は變形土器で口縁端部が肥厚、拡張され、2条以上の凹線文が施されたものである。口径より胴部最大径が大きいものである。29と30は屈曲部外面に粘土が巻かれ、そこに指頭による刻み目が施されている。28は屈曲部が「C」字状になり、屈曲部内面までケズリが施されている。後期初頭と考えられる。31～33は變形土器の底部で、くびれて立ち上がる。

34はミニチュアの變形土器である。高台状の上げ底で、大きくくびれて立ち上がる。

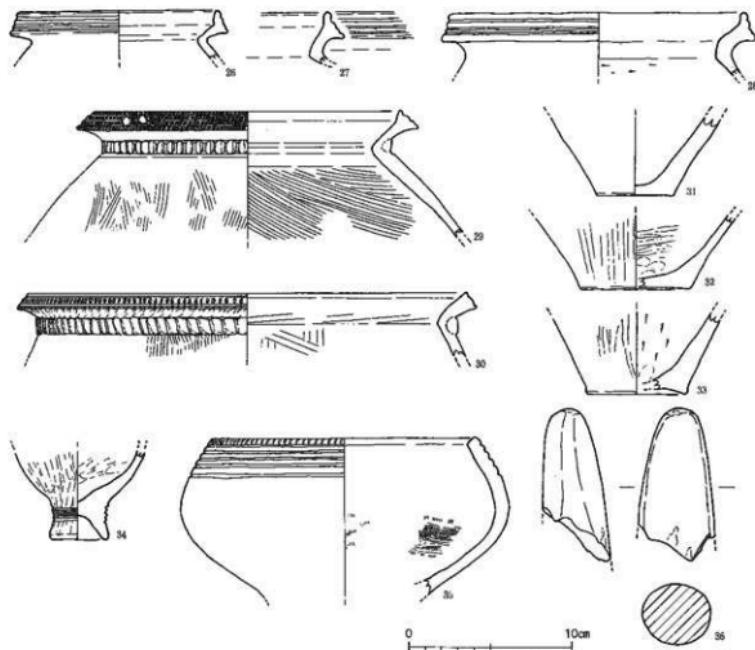


図10 1-3区 5層 出土遺物実測図(2)(1:3)

くびれ部外面には4条の凹線文が施されている。

35は高環の口縁部で、口縁部は内湾して立ち上がる。口縁部外面には5条の凹線文が巡り、口縁端部には刻み目が施されている。

36は磨製石斧の基部である。基部は尖り気味で、横断面形は円形をなす。

(3) 木製品 (図11~14・図版5、14、15)

木製品は約50点出土した。そのほとんどが建築部材である。建築部材のほとんどは、板

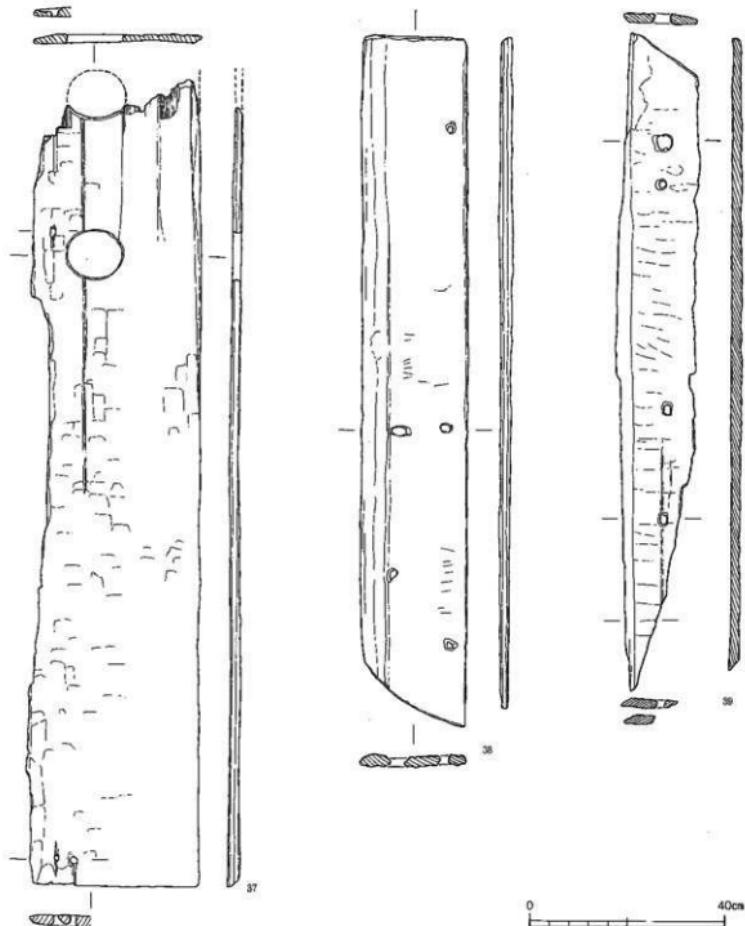


図11 1-3区 5層 出土遺物実測図 (3) (1:10)

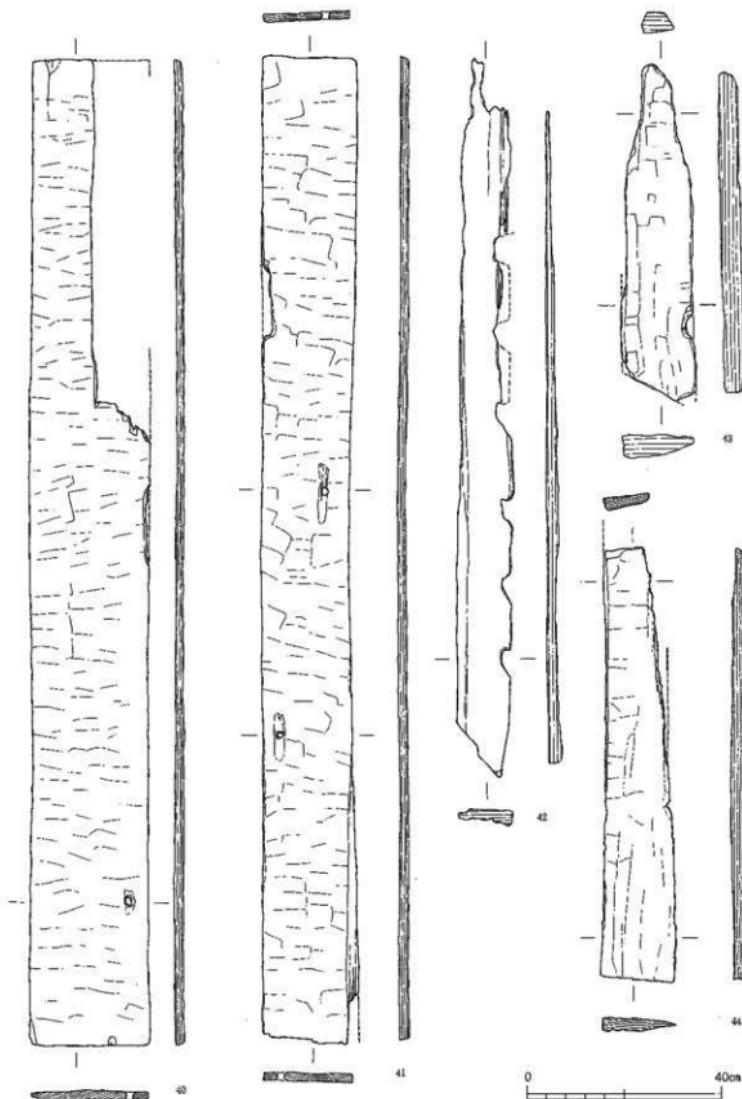


図12 1-3区 5層 出土遺物実測図(4) (1:10)

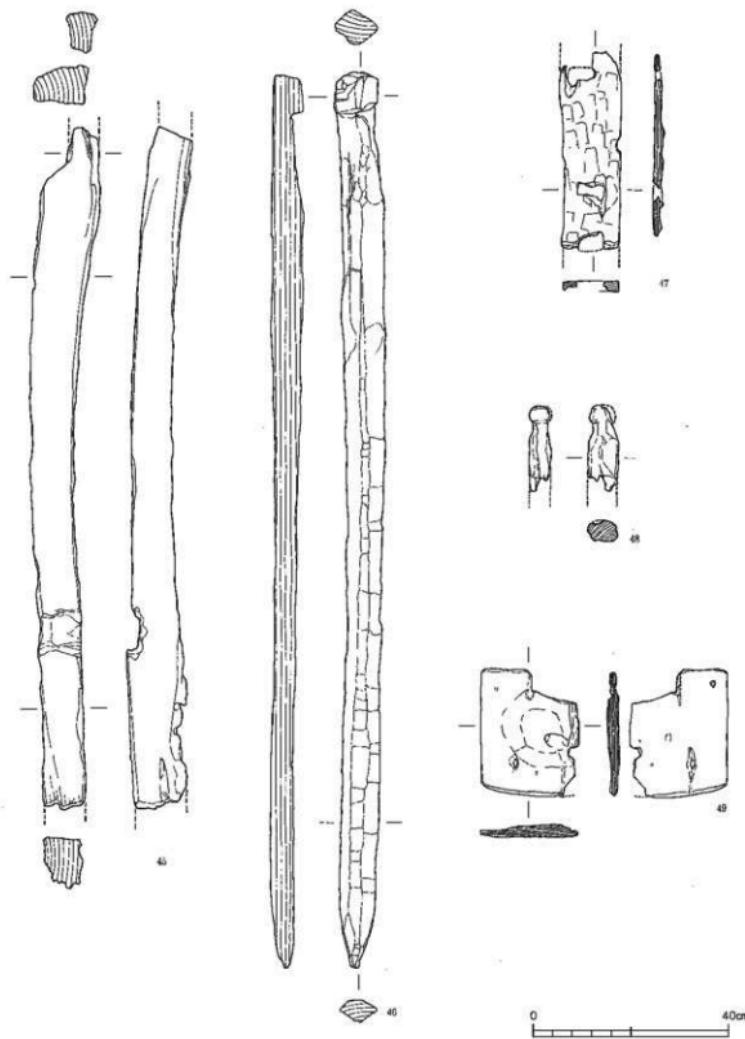


図13 1-3区 5層 出土遺物実測図 (5) (1:10)

材であるが、板材はさらに加工され、矢板に加工転用されたものが多い。

木製品の出土状況から判断すると、すべてが同時に溜まつたのではなく、弥生時代中期後半の一定期間に埋没したと考えられる。掲載した木製品は14点である。

37～46は建築部材である。37は床材で、楕円形の穴が2個所にある。柱を通した穴の可能性がある。樹種はスギ科スギ属スギである。出雲市の海上遺跡（出雲市教育委員会2002）でも同じものが出土している。

38～41は壁材である。42は破風板と考えられる。樹種はスギ科スギ属スギである。43は鋤の未成品である。完成前に矢板に転用したのであろう。44は床材であろう。45は横架材である。46は垂木である。47は壁あるいは床材であろう。樹種はヒノキ科クロベ属クロベである。48是有頭棒である。49は鍬の未成品である。樹種はブナ科コナラ属アカガシ亞属である。

50は鳥形木製品で、くちばしから尾にかけて扁平なつくりである。全長15.8cm、厚さ2.1cm。くちばしの部分は欠損している。穿孔はない。樹種はヒノキ科アスナロ属。島根県内の弥生時代の鳥形木製品は、出雲市では今回報告する毫丁田遺跡の1点の他に、矢野遺跡で1点（未報告）、松江市では西川津遺跡で2点、タテチョウ遺跡で2点、計6点が出土している。毫丁田遺跡の例は、西川津遺跡IV海崎地区出土（島根県教育委員会1988）のものと類似している。

木製品の時期は、土器から弥生時代中期後半と考えられる。14点中5点は高級アルコールによる保存処理、樹種調査を行った。樹種調査については、分析編に掲載している。

4まとめ

1～2区・1～3区は、弥生時代中期後半の旧河道が確認できたことが大きな成果であった。1～2区は、旧河道の左岸、1～3区は旧河道の中心部にある。旧河道最下層の5層からは、弥生時代中期後半の土器、磨製石器、木製品が出土した。なかでも、鳥形木製品が注目される。鳥形木製品は拠点集落から出土することが多いといわれている。毫丁田遺跡が拠点集落であったかどうかは現状では明確ではない。今後の、発掘調査や周辺集落との関係を明らかにして、評価をしていくべきであろう。

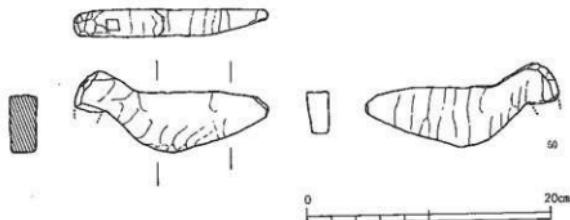


図14 1-3区 5層 出土遺物実測図 (6) (1:4)

第3節 4区の調査

4区は1-3区の北側、2区の西側に位置する。東西27m、南北4.5mで調査面積120m²。

1 土層堆積状況(図16・図版7)

基本層序として、上から、造成土(1層)、旧表土・耕作土(2層)、粘質土(3層)、粘砂土(4層)、粗砂(6層)が確認された。

重機により1層と2層までを掘削し、3層から人力で調査を実施した。調査の結果、3層、4層は河道の浸食、堆積が繰り返しここで形成されたと考えられた。そのため、発掘調査で出土した遺物は、再堆積を繰り返し、中世～弥生時代の遺物が混在して出土している。したがって、確実に遺構から出土したといえる資料は少ない。発掘調査では明確にできない遺跡の形成状況を、自然科学分析を用い検討を行った。

2 遺構(図15)

3層中に溝状遺構を確認した。溝状遺構は1-2、1-3区で確認した川河岸が埋まつた後にできたと考えられる。土層断面では数条の溝状遺構が推定できるが、平面で確認できたのは、SD01、SD02の2条である。また、井戸(SE01)を確認した。

SD03は6層に掘りこまれている。SD03がどこから掘り込まれているかは不明で、SD03と4層の関係は不明である。6層では性格不明なSX01、1-3区から続く旧河道を確認した。

(1) 溝状遺構(図15、16・図版6)

SD01

SD01は調査区の東から西へほぼ直線的に流れる溝状遺構である。長さ約20m、幅約1.2m、深さ約20cmを測る。3層上面で検出している。3層からは近世の遺物が出土していることから、SD01も近世頃の遺構と考えられる。

SD02

SD02は調査区の東から西に蛇行して流れる溝状遺構で、長さ約15m、幅約80cm、深さ約10cmを測る。3層中で検出し4層まで掘り込まれている。中世頃の遺構と考えられる。

SD03

SD03は調査区に東から西へ直線的に流れる溝状遺構である。溝の左岸側は調査区外にあるため、正確な幅は不明である。また、溝の西側の状況は不明である。掘り込み面は不明で、6層に掘り込まれている。AMS年代測定結果は、古墳時代中期～後期という値が出ている。

(2) 井戸(図17・図版8)

SE01

楕円形の土坑に木製の井戸側を検出した。井戸側は1.1m四方の正方形で、縦板組で隅柱横桟型をなす。調査中に、南側が崩落したため、井戸の全容は不明である。井戸側の中から遺物は出土していない。掘形の埋土から図17の51～53の土器が出土している。51は須

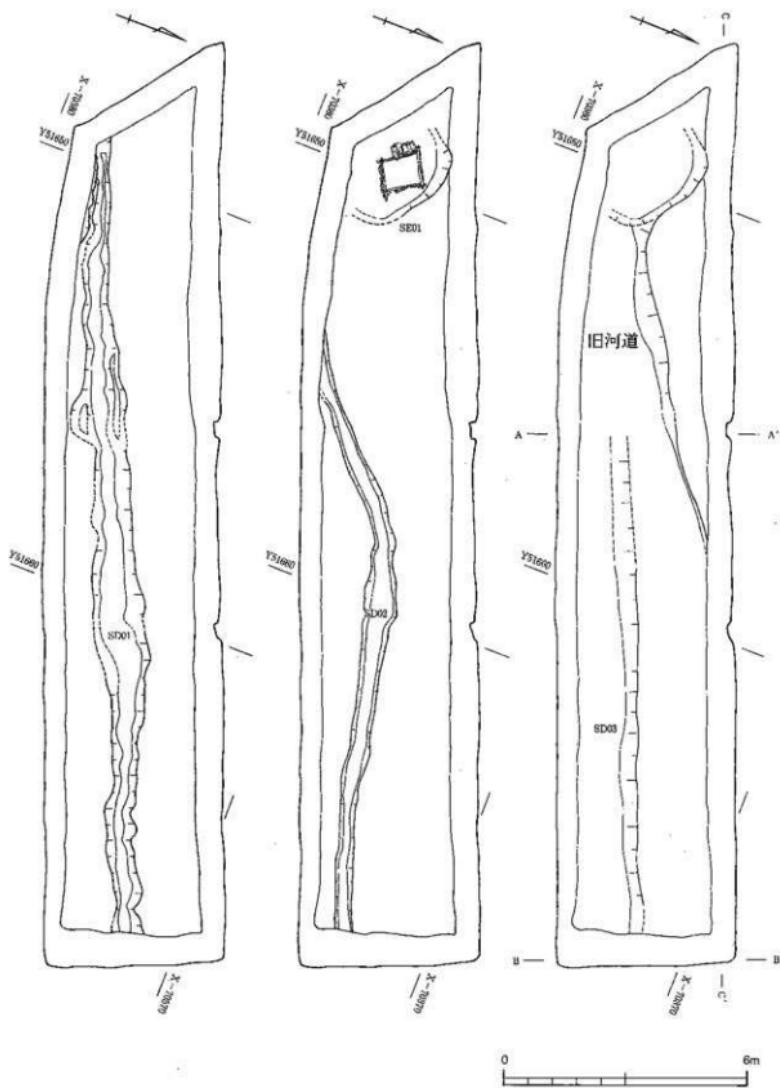


図15 4区 調査区実測図 (1:120)

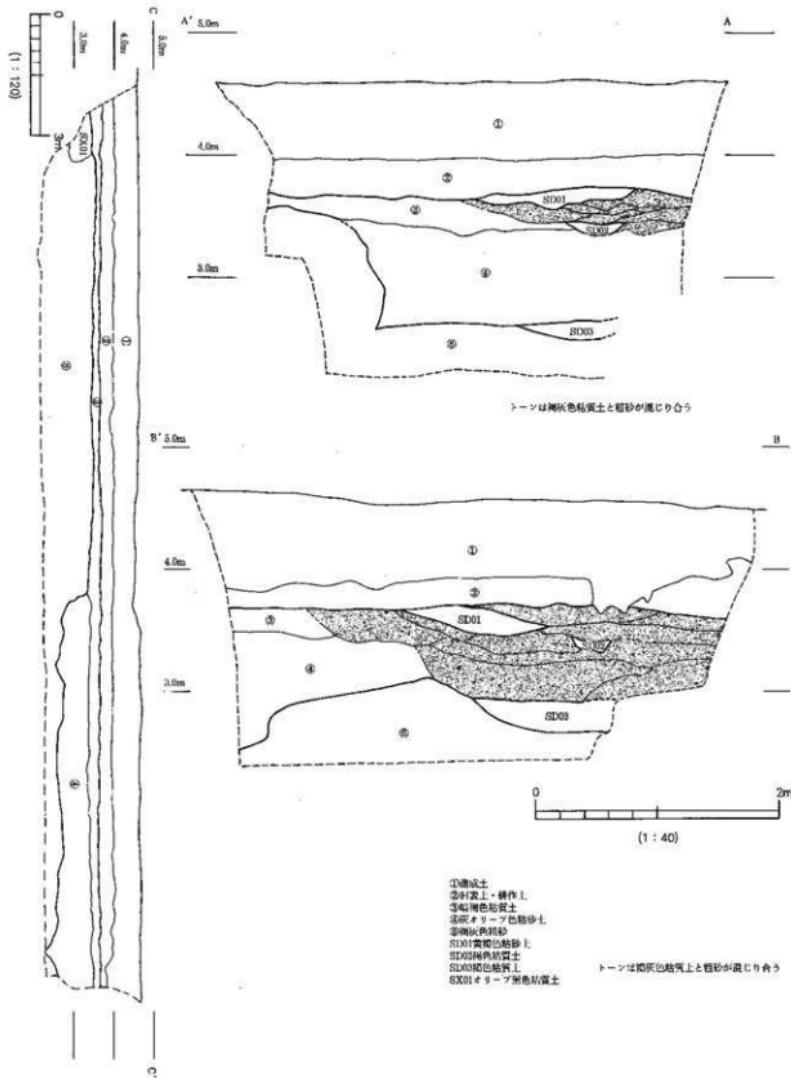


図16 4区 土層断面図

恵器の壺の底部片で、丸底に近い。52と53は土師器片である。52は脚付の壺の底部で、11世紀頃である。53は壺の底部である。11～12世紀頃である。52と53から、井戸の時期も11～12世紀頃と考えられる。

(3) 旧河道（図15・図版7）

調査区の西半分で1～3区から続く旧河道の右岸を確認した。埋土は4層であるが、浸食、堆積が繰り返しここっており、一旦埋没した後に、SD02やSD01などにより浸食されたと考えられる。旧河道の埋土である4層からは中世にかけての遺物が多量出土しているが、SD01～SD03のような溝に伴う遺物も含まれている。発掘調査では、4層と溝の遺物を区別して取り上げることができない難しい上層であった。

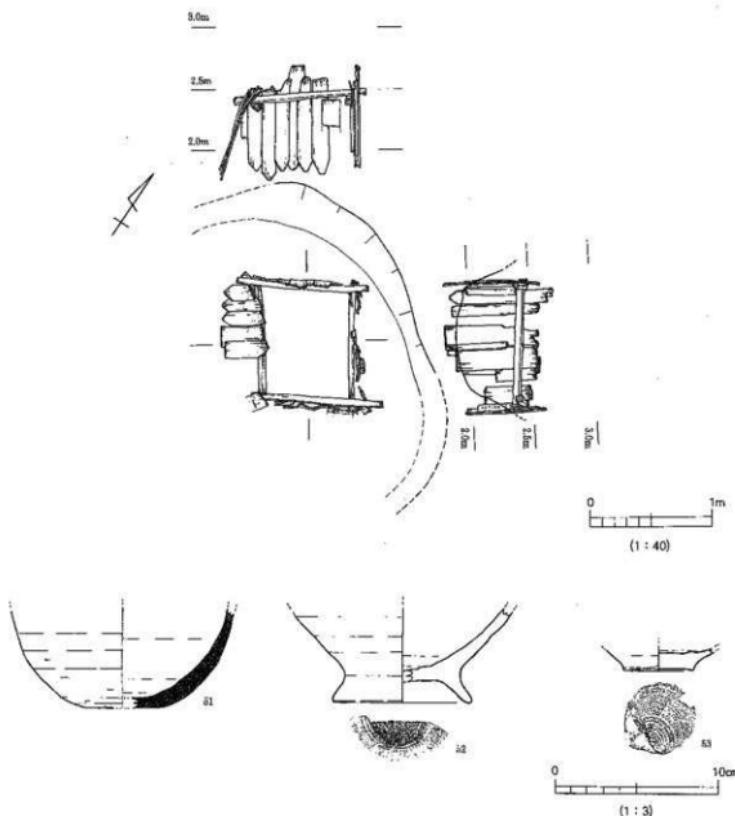


図17 4区 SE01実測図・出土遺物実測図

(4) SX01 (図16・図版7)

SX01は調査区の西側北壁に位置する。平面での確認はできず、断面のみで検出した性格不明の遺構である。遺物は出土していない。AMS年代測定結果では、弥生時代中期頃の値が示されている。旧河道が埋没しあじめた頃に、掘りこまれた遺構かもしれない。

(1) 2層出土遺物 (図18・図版16)

2層は旧耕作土である。若干あるが遺物が出土したので主要な遺物を掲載する。54は越州窯系青磁碗の底部片である。55は中国製白磁碗の口縁部片で、11~12世紀のものである。56は金代の貨銭で、「正隆元宝」(初鑄1158年)である。

(2) 4層出土遺物

縄文・弥生土器 (図19、20、21・図版15、17)

57~60は縄文土器である。57は後期の磨消縄文土器の波状口縁部である。58~60は粗製深鉢の破片で、58・59は胴部片、60はやや上げ底の底部片である。

61は弥生時代前期の如意形口縁壺で、胴部上半に一条の沈線が巡る。62は弥生中期中頃の壺の口縁部片で口縁端部が指ナデによりつまみ上げられている。63は弥生中期後葉の壺で、口縁端部が上下に拡張されている。64・65は弥生中期中葉の広口壺で、突帯の装飾がある。66は広口壺であるが、口縁部の器壁が64よりも薄く、口縁端部は指ナデによりつまみ上げられている。当方では珍しいものである。67~74は壺の胴部から底部にかけての破片である。弥生中期後半であろう。75は高壺の脚部で、脚外面に3条1組の沈線が2段に施されている。弥生中期後葉であろう。

須恵器 (図22・図版16)

76~95は須恵器である。76と77は坏蓋、78は坏身である。79~81は低脚無蓋高壺である。79は脚部片に、二角形透かしがある。80の坏部は浅い単純なもの。脚部には3方向に円形透かしがある。81は脚部片で、2方向の透かしは切れ目で表現され、片面には2カ所に切れ目が入れられている。82・83は大壺の頸部片で、外面は沈線と波状文で飾られる。84は壺の口縁部である。76~84は占墳時代後期末（6世紀末~7世紀前半）頃と考えられる。

85は輪状つまみのある蓋である。86は擬宝珠状つまみのある蓋であるが、つまみは欠損

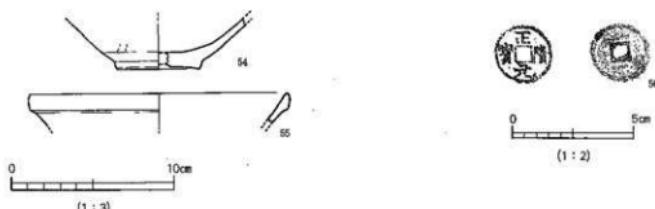


図18 4区 2層 出土遺物実測図 (54・55=1:3, 56=1:2)

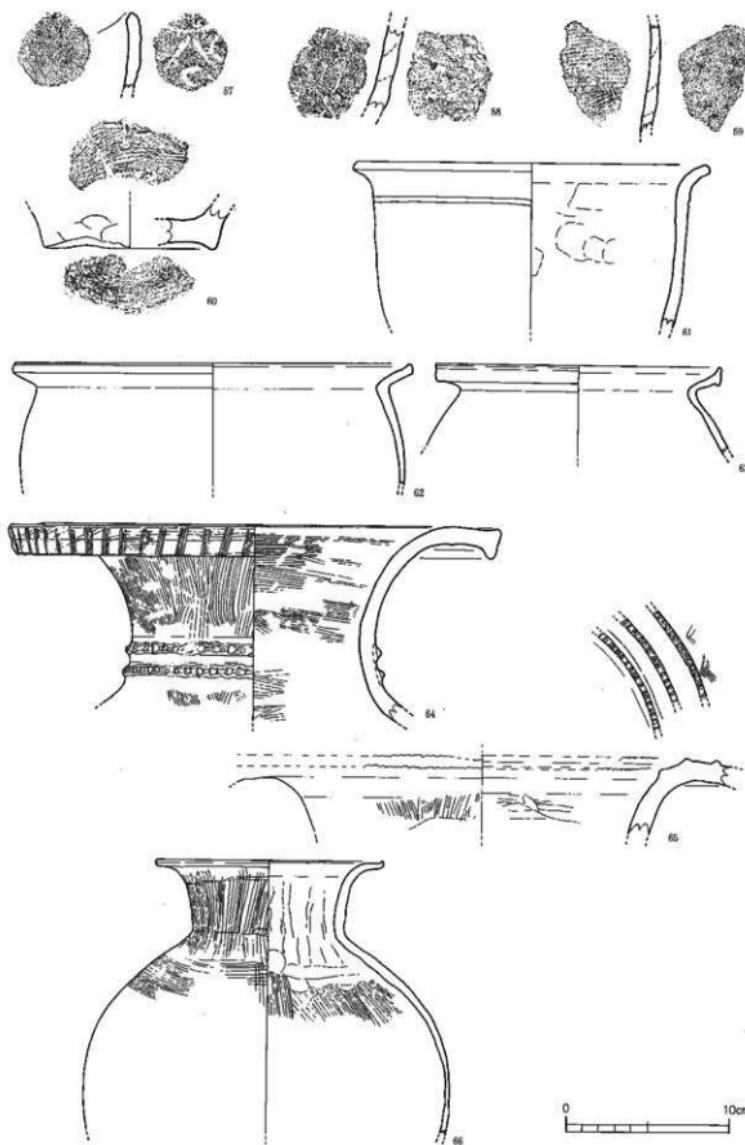


図19 4区 4層 出土遺物実測図 (1) (1:3)

している。87は壺の口縁部片である。88は壺の底部片で、ヘラ書きで「×」が刻まれている。89・90は高台の無い壺の底部片で、回転糸切りが施されている。91～94は高台付の壺

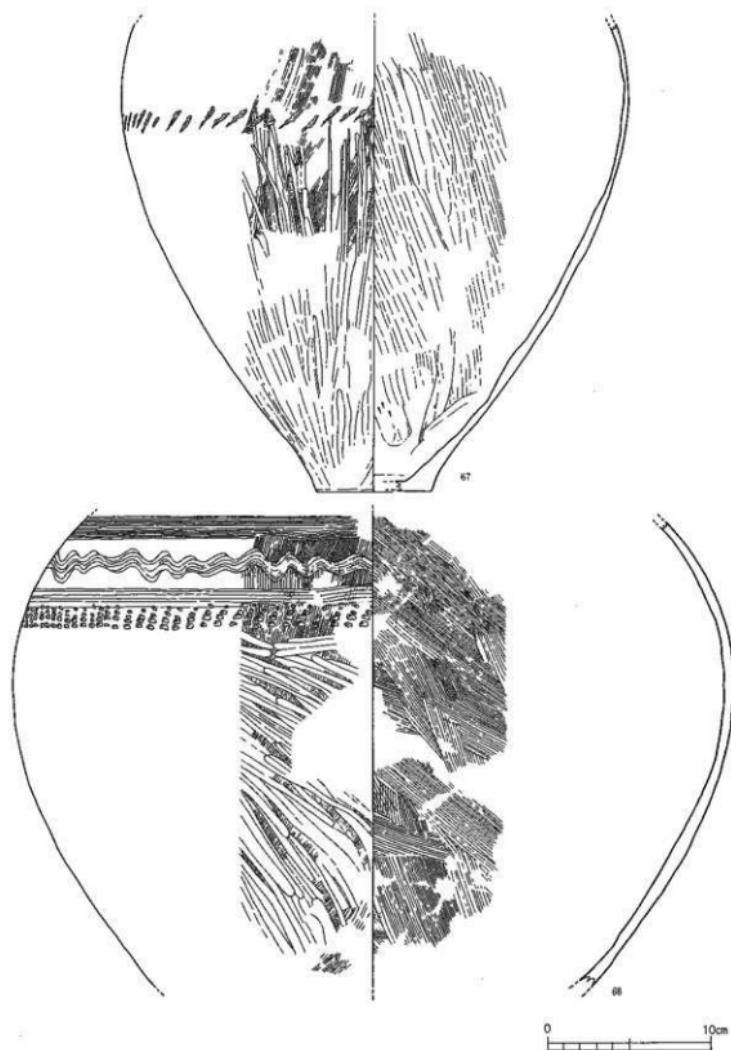


図20 4区 4層 出土遺物実測図 (2) (1:3)

の底部片である。95は壺の胸部から底部にかけての破片で、底部は平底をなす。85～95は8世紀～9世紀頃と考えられる。

土師器・土製支脚（図23、24、25・図版16、17、18）

96～115は土師器である。96は甕の口縁部である。97は壺の底部片である。98は小形の壺の胸部片である。外面胸部上半に暗文が施されている。99～101は高壺の脚部片である。

102～104は壺で、102は器壁が厚い。104は器面の仕上げがなく、粘土の接合痕や指頭圧痕が残る。96～100・102は赤色顔料が施されている。96～104は古墳時代中期から奈良時代と考えられる。

105～108は甕の口縁部から胸部にかけての破片で、古墳時代後期から奈良時代頃と考えられる。109・110は鍋の破片で、奈良～平安時代と考えられる。

111は高壺の脚部片で、古墳時代後期頃と考えられる。

112～115は甕である。112・113は口縁部片、114・115は脚部片である。

116～120は上製支脚である。116～118は3方向に突起があり、穿孔が無い。119は2方向の突起と、貫通孔をもつ。120は2方向の突起があり、非貫通孔がある。116～120は6世紀～8世紀と考えられる。

軒丸瓦（図26・図版18）

121は瓦当部の1/6ほどの破片で、丸瓦の接合部はない。瓦当部の下端が尖っており、

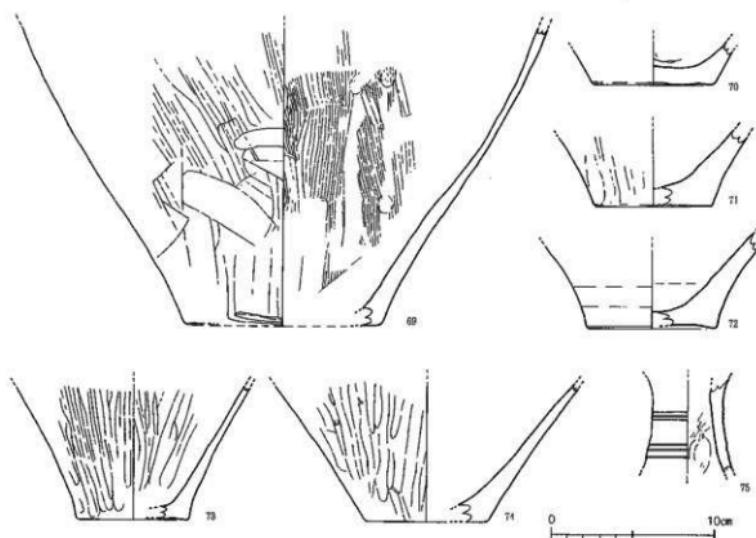


図21 4区 4層 出土遺物実測図（3）(1:3)

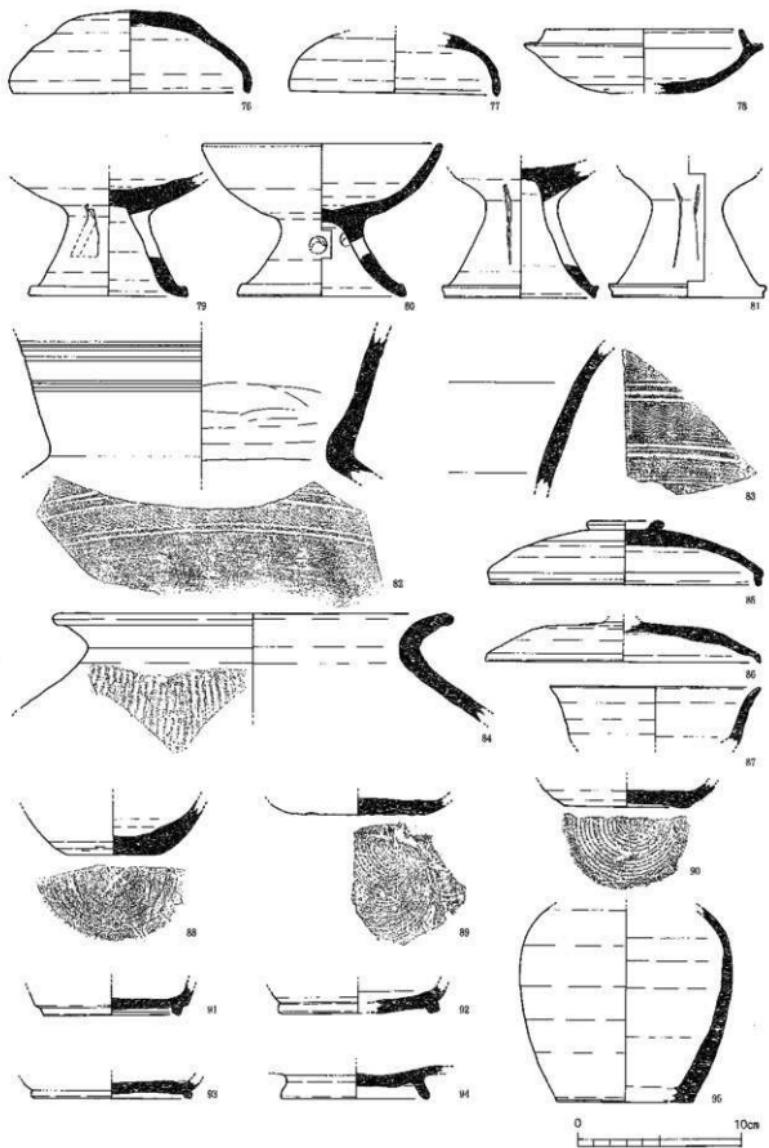


図22 4区 4層 出土遺物実測図 (4) (1:3)

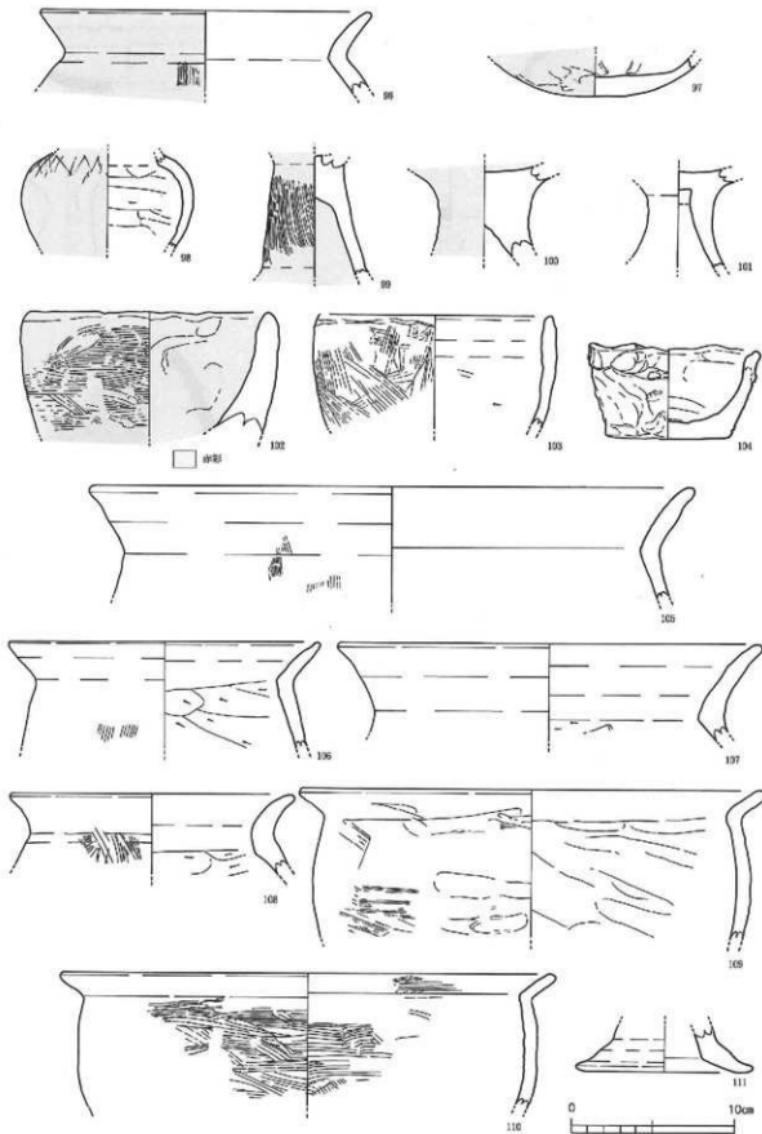


図23 4区 4層 出土遺物実測図 (5) (1:3)

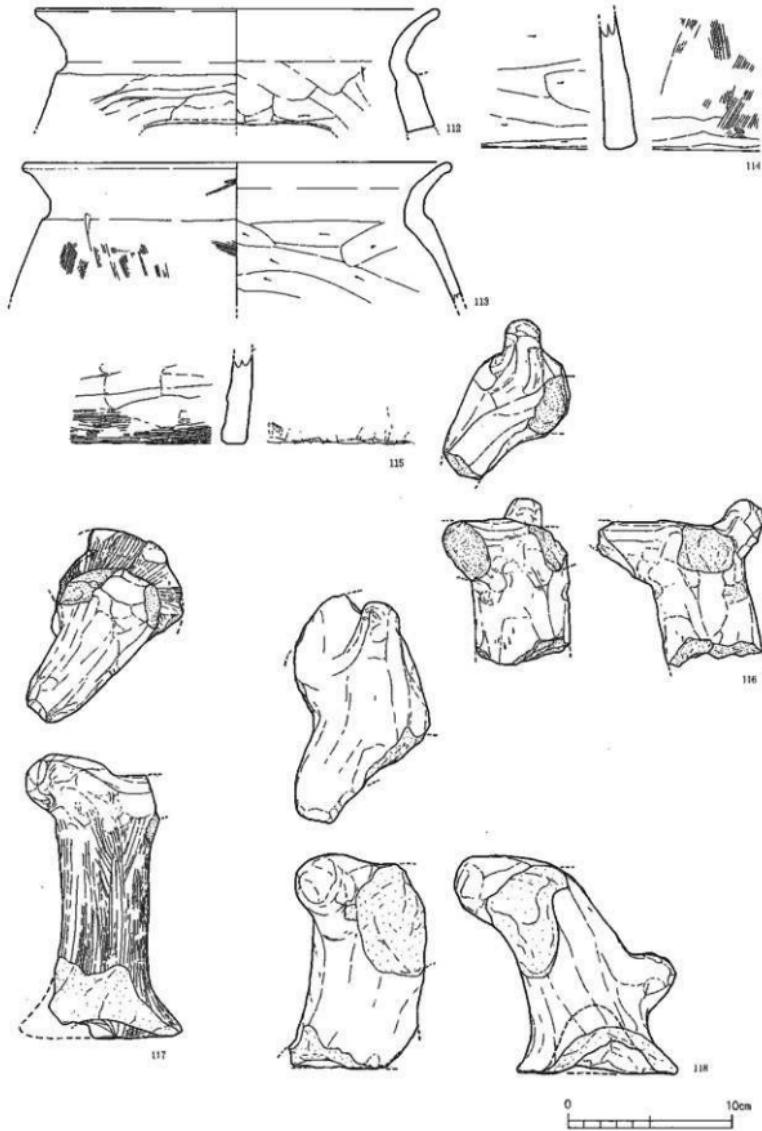
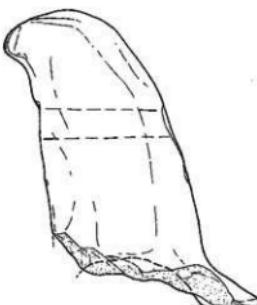
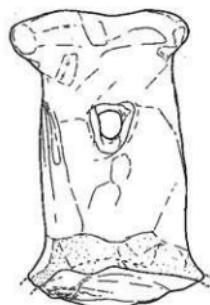
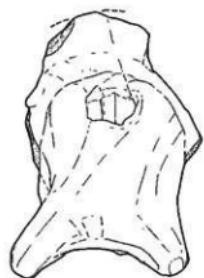
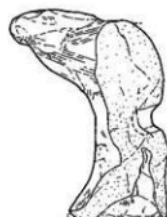


図24 4区 4層 出土遺物実測図 (6) (1:3)



119



120



図25 4区 4層 出土遺物実測図 (7) (1:3)

いわゆる「水切り瓦」(松下1969・1993)とわかる。

瓦当紋様は、圓線紋縁複弁八弁蓮華紋である。凸型の中房に1+7(推定・後述)の蓮子があり、中房の周囲には珠紋帯がめぐる。蓮華紋は、子葉の周りに輪郭線をもった複弁紋で、間弁はY字形をしている。外区には、断面三角形のやや太い圓線2条がめぐる。外縁はない。

瓦当裏面は、ナデ調整で仕上げてあるが、格子叩き痕かと思われる凹凸が残っている。

瓦当下端の突起の側面および、瓦当側面はヘラケズリ調整がおこなわれているが、瓦

当側面には木理圧痕が明瞭に残っており、左右分割型のカセ型を使った瓦当部成形をうかがわせる。

胎土は緻密で、石英・長石の細粒をわずかに含む。須恵質に近い堅い焼きで、灰色をしている。いずれも復元で、瓦当径16cm、中房径4cm、弁区径11cmである。

壱丁田遺跡から出土したこの軒丸瓦は、神門寺境内廃寺と同范である。

神門寺境内廃寺からは、2種類の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦(ともに「水切り瓦」)が出土している。一つは、中房は大きいがくぼんでいてその周囲に珠紋帯のないタイプで、松下正司氏のいう「F I B」。もう一つは、中房が凸型でその周囲に珠紋帯のあるタイプ、松下氏のいう「F II」である(分類名は(松下1993)による)。

壱丁田遺跡の神門寺境内廃寺同范軒丸瓦は、2種類のうち「F II」である。破片に残る弁の一つには、間弁との間に大きな範傷があり、これが神門寺境内廃寺F IIにも確認できる。神門寺境内廃寺F IIは、中房の蓮子が1+7の配置で、中房周囲の珠紋帯は総数24個を数える。出雲市所蔵資料と比較すると、瓦当下端部に位置する蓮弁には壱丁田遺跡例と同じ範傷があり、瓦当の取り付け位置が一致している。

さて、神門寺境内廃寺以外で神門寺境内廃寺F II軒丸瓦が出土したのは、今回が初例である。しかしながら、その評価は難しい。壱丁田遺跡は、神門寺境内廃寺の北西約2kmにあり、これまで古代の瓦が発見されたことがない。今回の調査区でも、ほかに古代の瓦は出土しなかったので、近辺に瓦葺建物が存在した可能性は低い。一方、軒丸瓦に摩滅した様子がうかがえないので、神門寺境内廃寺付近から流された可能性も考えにくい。評価については、今後の調査の進展に期待するしかないだろう。

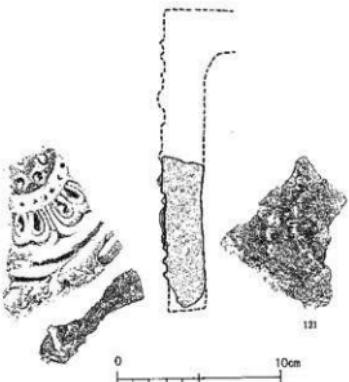


図26 4区4層 出土遺物実測図(8)(1:3)

中世土師器 (図27・図版16、17)

122～126は壺である。122・123は高台が無く、126には高台が付く。127～129は皿である。122～129は12世紀頃と考えられる。

陶磁器・羽口 (図27・図版16)

130は備前焼擂鉢で、16世紀頃と考えられる。131は瓦質培格の口縁部片である。132は天目茶碗の底部片である。133は中国白磁皿の口縁部片で、15世紀頃と考えられる。

134・135はふいごの羽口の破片で、134は送風孔が残る。

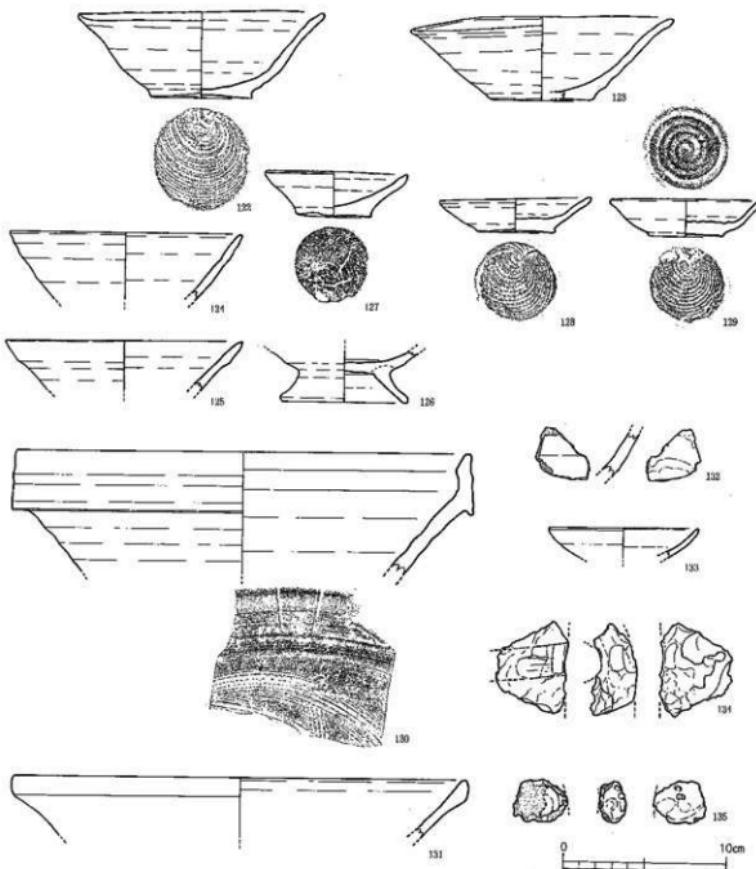


図27 4区 4層 出土遺物実測図 (9) (1:3)

4まとめ

4区は、壺丁II遺跡の中でも、土層の把握が難しい地点であった。それは、4層が堆積した後で、浸食・堆積が繰り返し行われていたからである。土層断面では幾つもの溝状の造構が重複していたが、平面での確認、掘削は非常に困難であり、遺物の取り上げも困難であった。したがって、報告では4層出土遺物としているが、その中の一部は4層堆積後に掘り込まれた溝に伴うものである。これらの溝が人工的な溝であったかは不明である。

人工的な造構としては、平安時代末頃の井戸SE01を確認した。SE01と同じ頃にSD02が流れていたと考えられる。

遺物としては、縄文後期の土器が出土したことが注目される。量は少ないが、神門水海の岸部で縄文人の痕跡が見えてきたのである。4区では、古墳時代中期～奈良時代にかけての遺物が多く出土した。特に、神門寺境内廐寺と同范である軒丸瓦が注目される。この軒丸瓦の評価は難しいが、壺丁II遺跡の性格に大きくかかわる遺物であり、今後の調査が期待される。

4区では、他にも平安時代～近世の遺物も出土していて、4区の東、遺跡の本体と考えられる部分では断続的に遺跡が営まれたことがわかってきた。

第4節 2区の調査

2区は南北5～9m、東西70mを測る、細長い調査区である。

1 土層堆積状況（図29・図版10、11）

基本的な層序として、表土、耕作土（2層）、黒褐色粘質土（3層）、粘砂土（4層）、粗砂（6層）が認められた。最下層の6層は調査区西側で西へ傾斜している。層が厚くなるため、4層を細分し、4-1層、4-2層とした。

2 遺構と出土遺物

(1) 第1遺構面（4層上面）（図28・図版9）

この遺構面からは溝状遺構8・上坑9・ピット多数を検出した。4層は奈良・平安時代の包含層である。

SD02（図30、33・図版10、18、19）

幅0.4m、深さ15cmの細い溝状遺構である。4区から繋がる溝で、4Gr付近で隅丸状に曲がり、南東方向の調査区外へと伸びていく。土層堆積状況よりSD05よりも先行して掘られたと考えられる。ほぼ、90度の角度で曲がっていくことから人為的に掘られた可能性がある。SD02埋土から須恵器と土師器が出土した。141・143～145は須恵器である。141は直径約24.4cmの大形の皿である。143・144は高台付碗の底部片である。145は壺の口縁部片である。142は土師器の壺の底部片である。これらは8世紀頃の遺物。しかし、4層は平安時代頃までに堆積している可能性があるため、SD02は平安時代以降中世までにできた溝状遺構である。

SD04（図30、33・図版10、11、18）

検出時は埋土にはほとんど差異が見られなかったことから同一の遺構として調査を行ったが、土層断面で観察したところ、2条の遺構（SD04-1・SD04-2）が重複していることが判明した。137～140はSD04から出土したものである。137・138・140は須恵器片で、139は土製支脚である。これらは8世紀頃の遺物。しかし、4層は平安時代頃までに堆積している可能性があるため、SD04は平安時代以降中世までの間にできた溝状遺構である。

SD04-1

幅1.1m、深さ15cm、長さは調査区東端から6Grまでの約45mを検出した。遺構は途中で、SD06・SK09等と交わり蛇行しながら調査区外に延びていく。自然流路である可能性が高い。

SD04-2

幅約0.4m、深さ25cm、長さ11m以上の溝状遺構である。11Grより東へ向かって延びるが、13GrでSD04-1と区別がつかなくなってしまうため、長さ11m以上とかわからぬ。

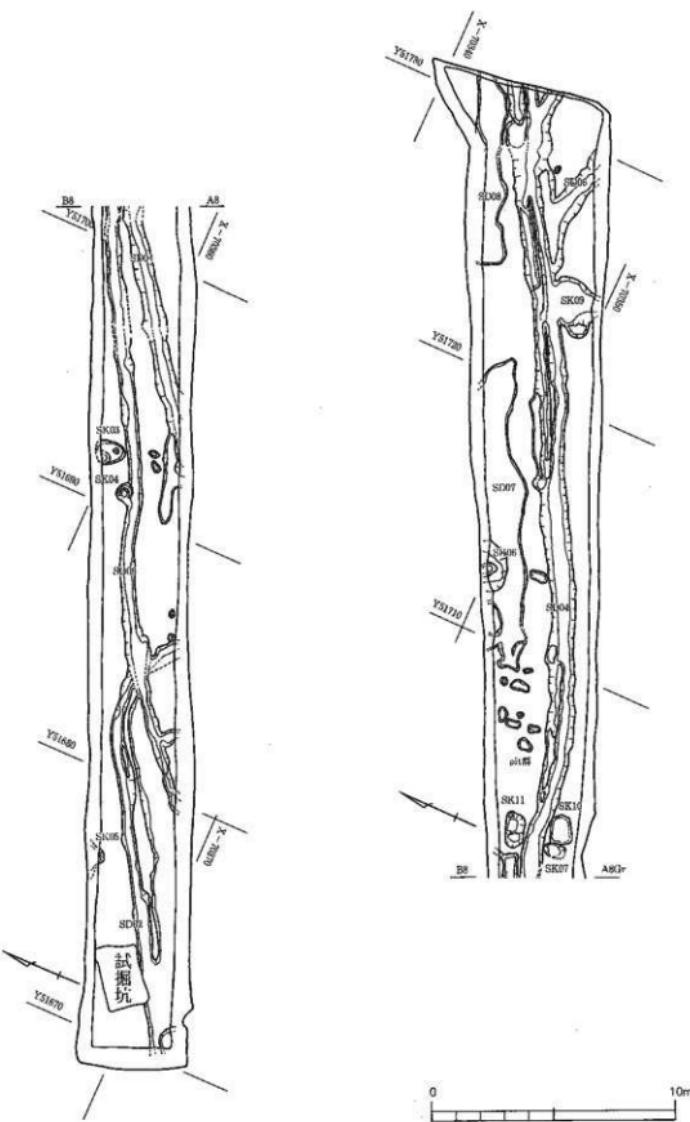


図28 2区 調査区実測図 (1:200)

SD05 (図30、34・図版18、19)

幅約0.5m、深さ約15cmの細い溝状遺構である。その断面形は緩やかなU字形である。B8杭付近から出現し、調査区に沿って南西へと延びていく。SD05からは、146~158が出土している。146・147は弥生土器である。146は弥生中期後葉の甕の口縁部で、口縁端部が肥厚し、凹線文が施されている。147は弥生後期中頃の器台の器受部片である。148~152は須恵器である。148・149は碗で口縁端部が外反している。150・151は甕の口縁部である。152は高台付壺の胴部片である。153・154は土師器の皿である。155は土師器の甕の口縁部の破片である。156・157は上製支脚である。157は2方向突起で非貫通孔がある。158は直線刃の大形石庖丁の刃部片である。これらの遺物は平安時代頃までのものである。しかし、4層は平安時代頃までに堆積している可能性があるため、SD02は平安時代以降中世までにできた溝状遺構である。

SD06

調査区南壁から北西へ向けて延び、SD04に合流する溝状遺構である。幅0.6m、深さ15cmを測る。幅はSD04よりも狭いが、深さや断面形はSD04と良く似ており、一連の遺構である可能性が高い。遺物は出土していない。

SD07・08 (図28、30)

この2つの遺構はいずれも深さが10cm程度で非常に浅いことから、後世の耕作によりほとんどが削平されていると考えられる。その延びる方向からみて本来は同一の遺構であった可能性が高い。調査区北壁に接しているため、全体の形状・規模ははっきりしないが、SD08の東側で幅1.1mを測る溝状遺構であることがわかる。遺物は出土していない。

以上で述べた溝状遺構はいずれも調査区に沿って東西に延びていくことがわかるが、何のために作られたものかははっきりしない。溝底はレベルが西に行くにつれ低くなっている。

SK03 (図31、33・図版18)

南北1.2m弱、東西1.0mの楕円形を呈する土坑である。断面形は緩やかな逆台形をしているが、遺構底の南寄り部分と西側でくぼみが認められる。若干ながら須恵器などの遺物が出土した。136は須恵器壺の口縁部片で、8世紀頃と考えられる。しかし、4層は平安時代頃までに堆積している可能性があるため、SK03は平安時代以降中世までの間にできた遺構である。

SK04 (図31)

この遺構は直径0.8m、深さ0.4mの円形の土坑である。断面形は2段掘りとなっており遺構底面は直径約15cm程度になる。土層断面ではSD05に切られていることが観察でき、SD05よりも古い遺構である。最も深いところでも標高3.1mであり湧水のある粗砂層までは至っておらず、井戸ではなく柱穴である可能性が高い。

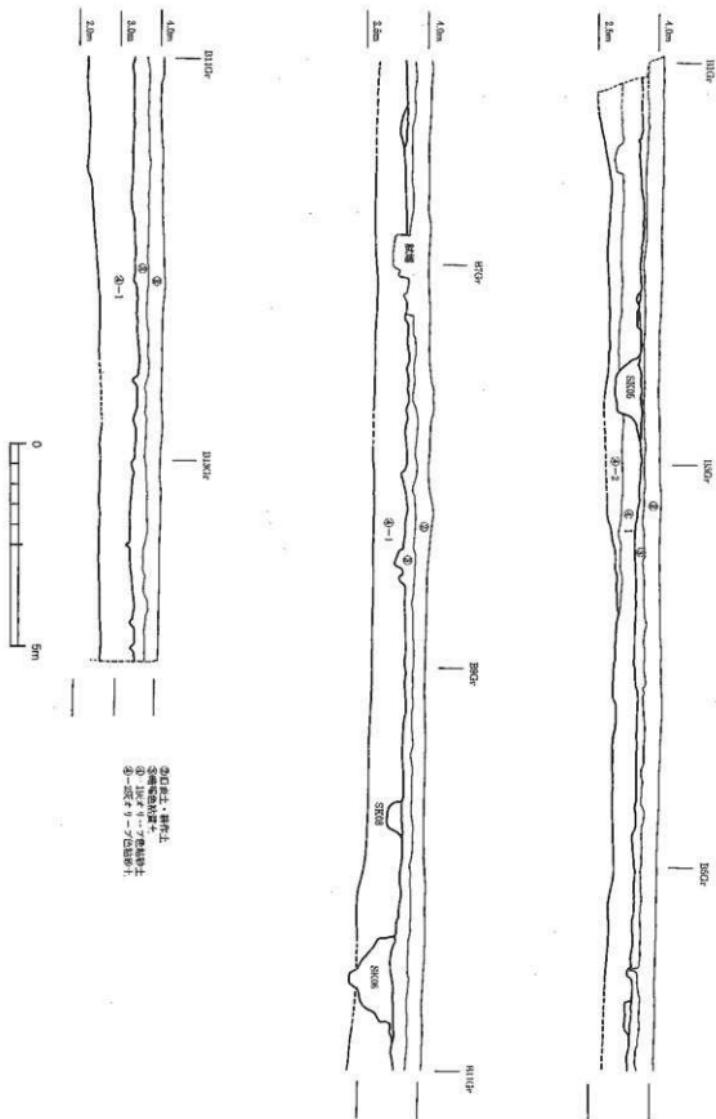


図29 2区 土層断面図(1) (1:120)

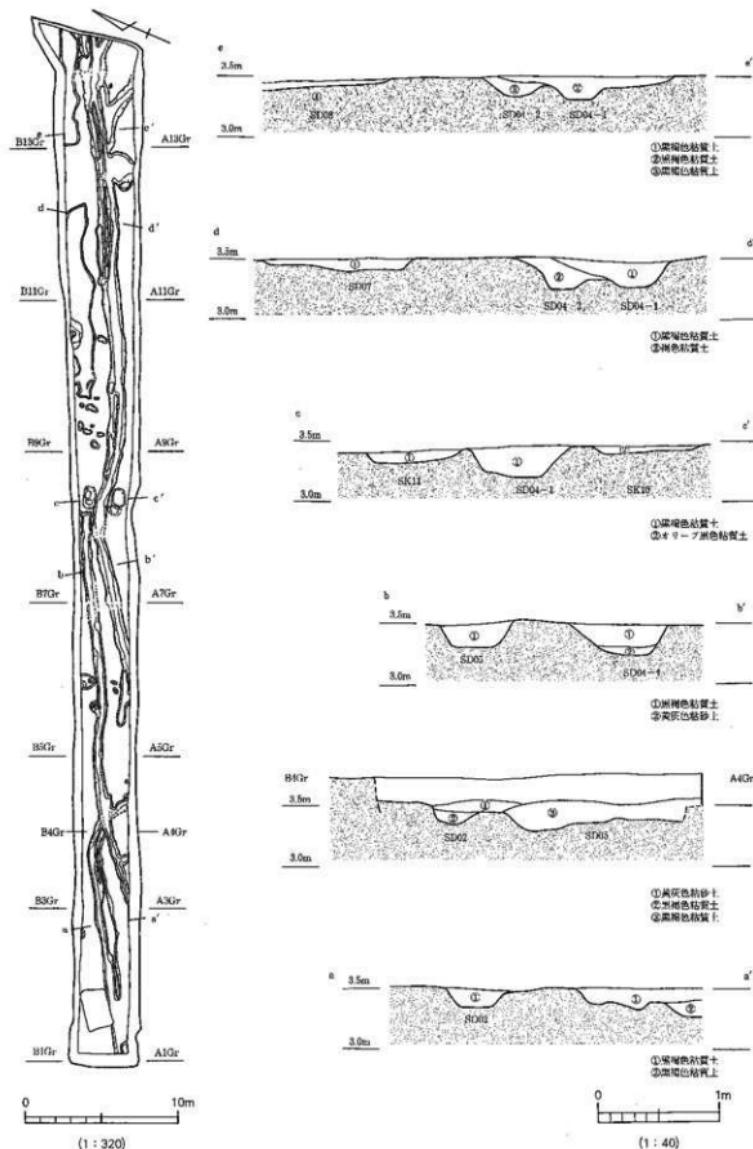


図30 2区 土層断面図 (2)

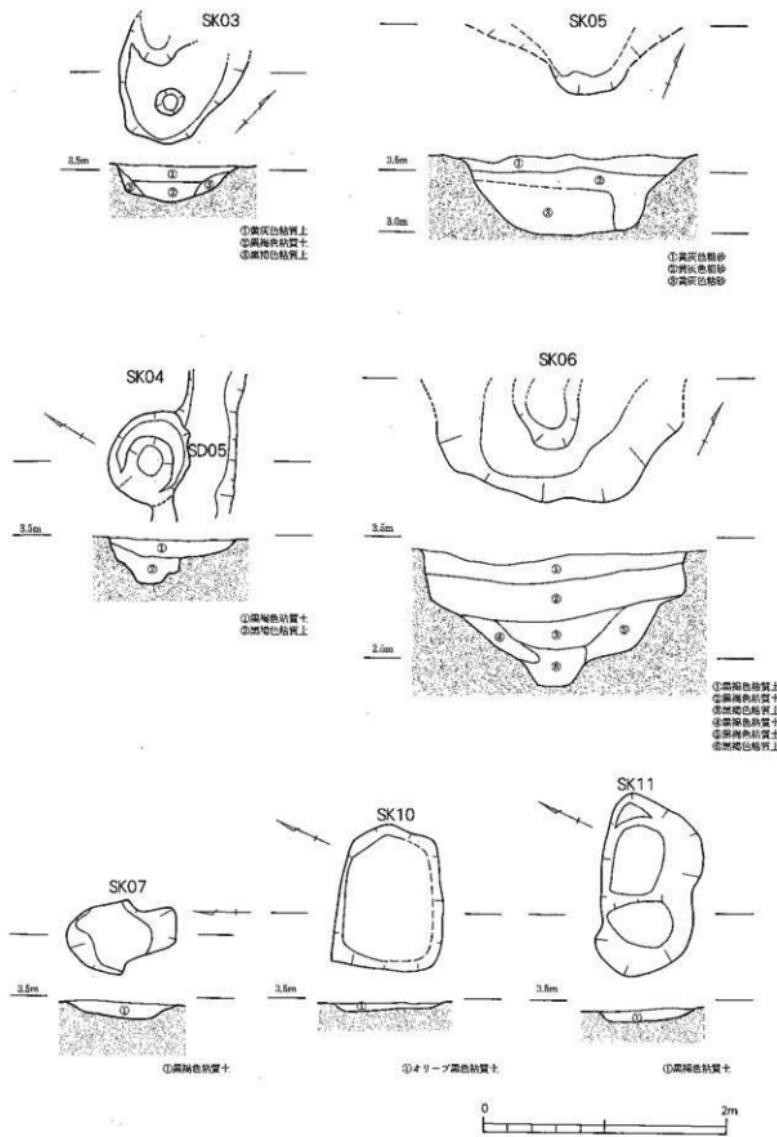


図31 2区 遺構実測図 (1:40)

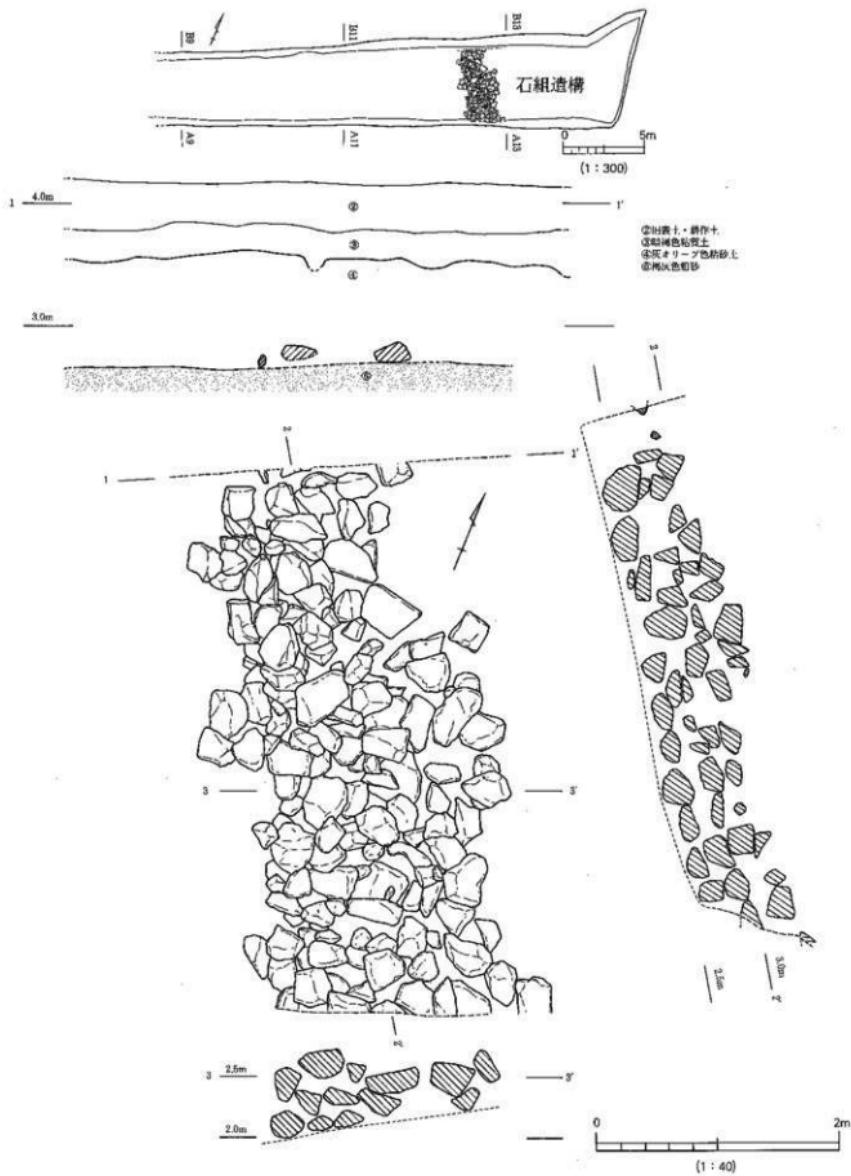


図32 2区 石組造構実測図

SK05 (図29、31)

この遺構で的に確認できたのは遺構端の一部である。土層で確認できる規模は、幅1.7m、深さ0.6mを測るしっかりした遺構である。断面形は逆台形で底面は平らになっている。この遺構は柱穴の可能性がある遺構であるが、他に建物状に並ぶような状況は認められない。

SK06 (図29、31)

東西2.1m、南北は復元すれば1.8m、深さ1.1mを測るほぼ円形の土坑と考えられる。遺構壁がだいぶ崩壊したようで、非常にあいまいとなるものの元々は2段掘りであったと考えられる。

遺構底には直径約30cmの円筒状のくぼみがあり、土層堆積状況から本米は桶状のものが設置されていた可能性がうかがえる。遺構底は粗砂層にまで至っており、湧水が激しいことから、遺構底に水溜が設置された井戸であろう。遺物は出土していない。

SK07 (図31)

南北0.9m、東西0.5m以上、深さ15cmの浅い土坑である。東側でSK10と接しているが、同時期かどうかはわからない。

SK08 (図29)

2区北壁断面でのみ検出した土坑である。調査区内では平面形を確認することができなかったが、断面では幅90cm、深さ40cmを測るしっかりとした遺構である。

SK09

直径1.9mの土坑である。SD04-1と接続していたため、当初は分岐する溝の一部として掘り下げたが、底面が不整形の円形を呈していたことから土坑と判断した。人頭大の石が散乱して出上り、底面から湧水することから廃棄された石組井戸の可能性も考えられる。

SK10 (図30、31)

東西1.2m、南北0.8m、深さ10cmの浅い土坑である。西側がSK07に接している。

SK11 (図31)

東西1.5m、南北0.8m、深さは10~20cmほどしかない非常に浅い土坑である。西側が高く東側が低くなっている。

Pit群 (図28)

9Grで検出されたピット群である。いずれも浅く、建物跡などとは考えにくい。また、人為的なピットかどうかもわからず、地形のくぼみである可能性もある。

これらの遺構は埋土が3層単層で構成されるものが多く、複数層が認められる遺構においても、埋土最上層は3層が堆積している。3層は中世～近世の遺物包含層と考えられるため、遺構の時期は中世以降近世までの時期であると推定される。

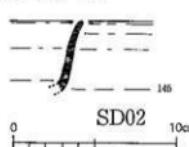
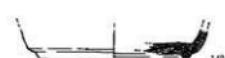
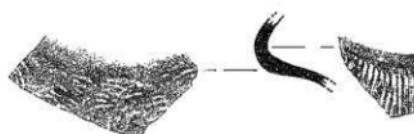
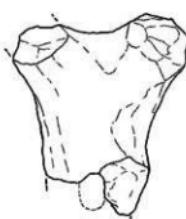
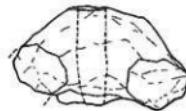
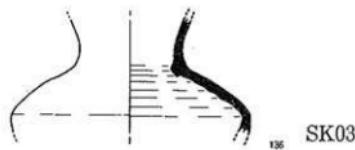


図33 2区 遺構出土遺物実測図 (1:3)

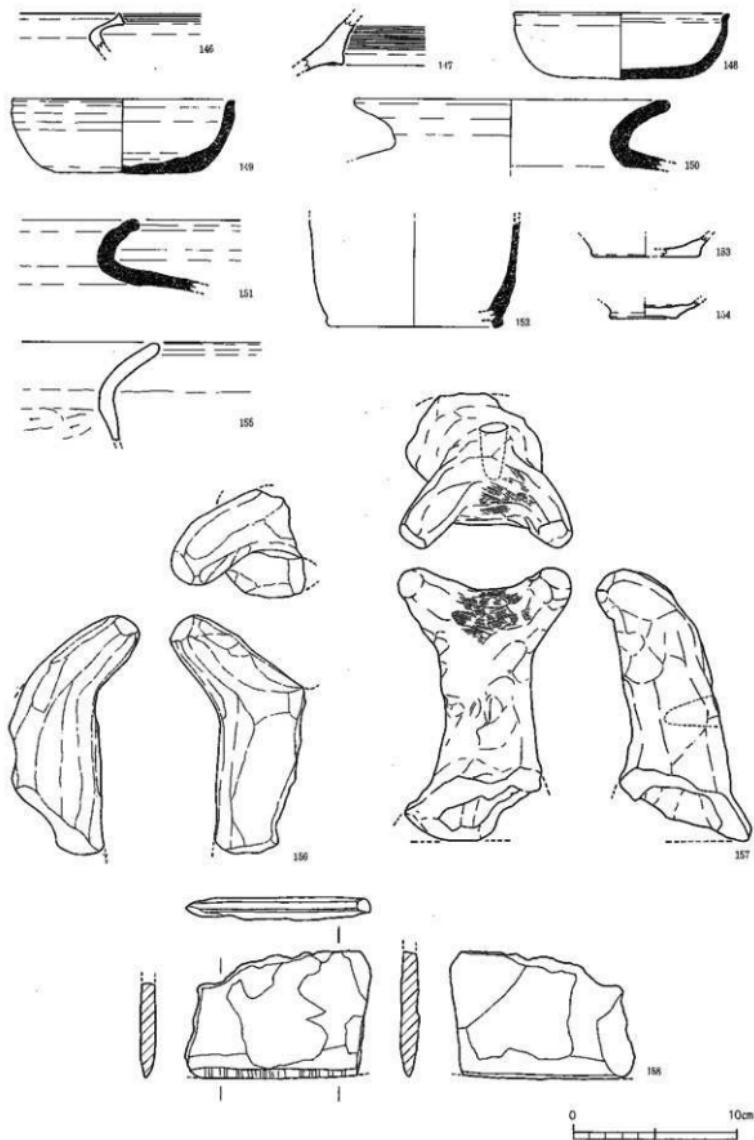


図34 2区 SD 05出土遺物実測図 (1:3)

(2) 第2遺構面(6層上面)

石組遺構(図32・図版9)

12Grの粗砂層(6層)上より石組遺構を確認した。この石組遺構は大小の自然石を最大幅2m、最大90cmの高さまで積上げた遺構である。北側壁部分では石の数が極端に減ってしまっている。南側へ遺構が続いていくのは間違いない。この遺構の性格は南北を通る暗渠と考えられる。ただ、この遺構に伴う人工的な盛土や掘り込みは確認できていない。暗渠と仮定すれば、北側は崩壊している可能性がある。

遺構の時期は4層が埋没する以前、古墳時代中期～平安時代頃と考えられる。

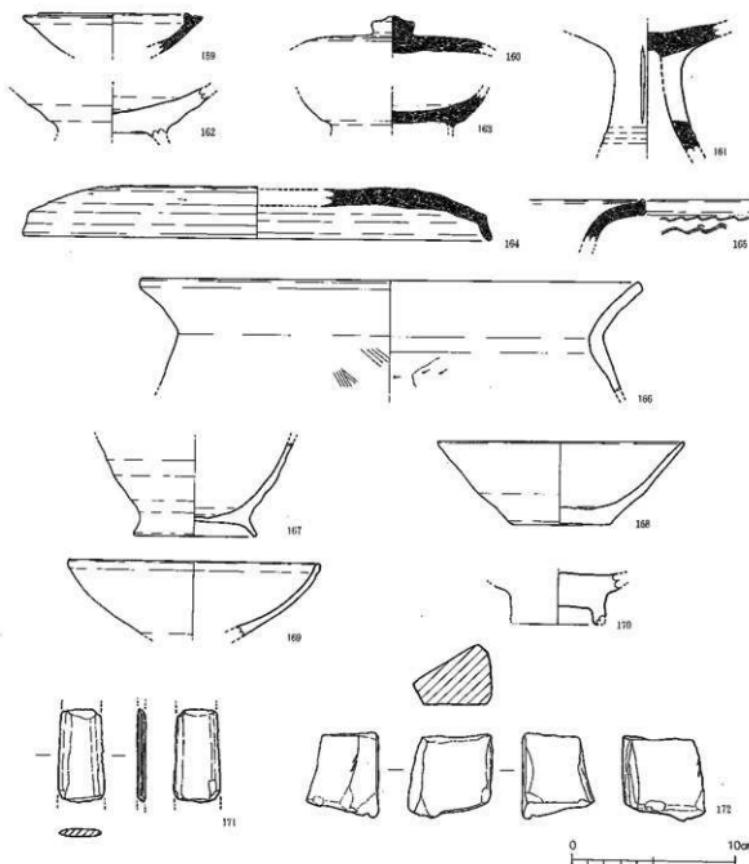


図35 2区 3層 出土遺物実測図 (1:3)

3 包含層出土遺物

3層からは弥生時代から近世の須恵器、土師器、石器などが出土した。

4層からは多量の弥生時代から平安時代の土器が出土している。基盤層と考えていた6層からも弥生時代前期の土器が出土した。

(1) 3層出土遺物(図35・図版19)

159～161・163～165は須恵器である。159はかえりのある环身である。160は擬宝珠状つまみをもつ蓋で、口縁部は欠損している。161は長脚無蓋高环の脚部である。脚の上段に切れ目の透かしを入れ、下段は欠損している。163は高台付の碗である。164は直径29.2cmの大形の蓋で、つまみ部分は欠損している。165は大腹の口縁部片で、外面に波状文が施してある。159～161・164・165は7世紀頃、163は8世紀頃のものであろう。

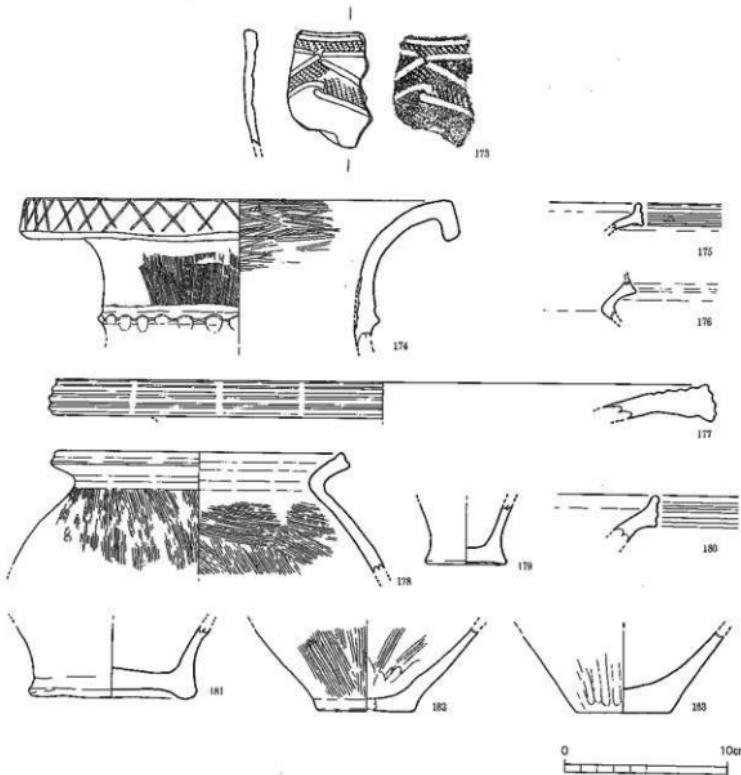


図36 2区 4-1層 出土遺物実測図(1)(1:3)

162・166～168は上部器である。162は高壺の接合部の破片である。器壁が厚い。古墳時代後期頃のものと考えられる。166は甕の口縁部片で、砂粒を多く含む。6～8世紀頃のものであろう。

167は高台付椀である。168は高台のつかない椀である。167・168は11世紀頃であろう。

169・170は磁器である。169は白磁椀の口縁部片で、近世のものであろう。170は青磁椀の底部片で、高台がつく。中世のものであろう。

171は磨製石剣の破片である。幅が3cmと細身である。172は砥石である。

(2) 2区4-1層出土遺物

4-1層からは、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、土製品、石器などが出土した。

縄文・弥生土器（図36・図版19、21）

173は縄文後期の磨消縄文土器の口縁部片で、中津式である。

174～183は弥生上器である。174は弥生中期中葉の広口壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁端部は下垂し、外面に斜格子文が施される。頸部には突帯が巡り、突帯には指による刻目が施されている。

175・176は甕の口縁部片である。口縁端部は上方に拡張され凹線文が巡る。177は、口径約41cmの広口壺の口縁部である。口縁端は肥厚し、凹線文が巡り、口縁部内面にも凹線文がみられる。178は胴部が大きく張る甕の口縁部から胴部上半にかけての破片である。一般的にみられる甕よりは胴が張り、器壁が厚い。口縁端部は指ナデでつまみあげられる。179は、甕の底部片である。底径約5cmを測り、やや上げ底で、大きくくびれて立ち上がる。178は弥生中期中葉、それ以外は弥生中期後葉であろう。

180は器台の口縁部の破片である。口縁端部は上方に拡張され、擬凹線文が施されている。弥生後期前葉であろう。

181～183は弥生土器の底部である。181は上げ底で、大きくくびれて立ち上がる。182は平底でややくびれて立ち上がる。183は平底でくびれず立ち上がる。181が古く、182・183と続く。183は弥生後期まで下るかもしれない。

247・248は弥生土器の底部片で、247は砂粒を多く含むため、弥生前期のものと考えられる。248は弥生中期末頃のものと考えられる。

須恵器（図37～39・図版19～23）

坏蓋（184～192）184は天井部と体部の境の外面に浅い沈線が巡る。185は口径約13.2cmを測る。184は6世紀末～7世紀初頭、185は7世紀前半であろう。186・187はかえりのある坏身である。187は口径約10.6cmを測る。かえりは小さく、底部外面にはケズリは施されない。

188～192はつまみのある坏蓋である。188は輪状つまみ、かえりをもつものである。口径約15cmを測る。189はかえりをもつ。つまみが欠損している。186～189は7世紀頃であろう。

190は偏平な宝珠つまみである。口縁端部は欠損する。191・192は口縁端部が垂直に折れ曲がる。

杯 (193~203・206~211) 193~203は椀状の杯である。193は小形で口径約10.1cmを測る。

194・196~203は底部から内湾して立ち上がり、口縁端部がくびれて外反する。底部調整には静止糸切り技法と、回転糸切り技法の両方がある。

195は口縁部片。内湾してそのまま立ち上がり、端部は外反しない。底部が欠損しているため明確ではないが、高台が付くものであろう。

206~211は高台付の杯である。206~208・211は内湾して立ち上がる。206・208は「ハ」字状高台が底部の外周の少し内側に付けられる。207は直立した高台が底部の外周に接して付けられている。211は口縁部が欠損しているが、207と同じ形態と考えられる。209・210は体部が直線的に開く形態である。直立した高台が底部の外周に接して付けられている。209は口径約15cm。

皿 (204・205) 204・205は高台付の皿である。底部水平で直線的に体部が開く。204は口径約18cm、205は口径18.2cmを測る。

これらの杯蓋、杯、皿のうち190~211は8世紀のものであろう。

壺 (212~221) 212は壺の口縁部片で、口径約21cmを測る。

213~221は長頸壺である。底部に高台をもつ。213は口縁部から胴部上半の破片で、口径約9.6cmを測る。頸部は外反しながら開き、口縁端部は丸く仕上げられる。214は頸部の破片である。215は高台から胴部にかけての破片で、底部は欠損している。胴部にはカキ日、底部近くはタタキが施されている。216は高台から胴部上半にかけての破片で、底部と頸部は欠損している。胴部上半と胴部下半の境が強く屈曲し、そこに1条の凹線が巡る。胴部上半には自然釉が付着している。内外面ともに回転ナデ調整。高台を張り付ける前に、底部に刻みを入れ、接着している状況がわかる。217は胴部の破片である。218は底部から胴部下半にかけての破片である。217・218は内外面ともに回転ナデ調整。219~221は底部の破片で、底部はナデ調整。220は高台の外側端部がつまみあげられ、突帯状になっている。221は2.5cmと高い高台をもつ。

甕 222は甕の底部と考えられる。底部は丸底で、約8cmを測る。外面はタタキが施された後に、「×」のヘラ記号が刻まれている。

甕 (223~225) 223は口縁部が欠損する。頸部は短い。底部は平底で、回転ヘラケズリで仕上げられている。224は体部片で、頸部が欠損している。円孔がある場所の沈線は、浅く途切れ途切れである。底部には回転糸切りが残る。225は体部片で高台がつく。体部下半はヘラケズリが施され、底部外面はナデが施されている。223~225は7世紀から8世紀頃のものであろう。

低脚高壺 (226~233) 226は脚部片で2方向に三角形透かしがある。脚高は4.4cmと低い。

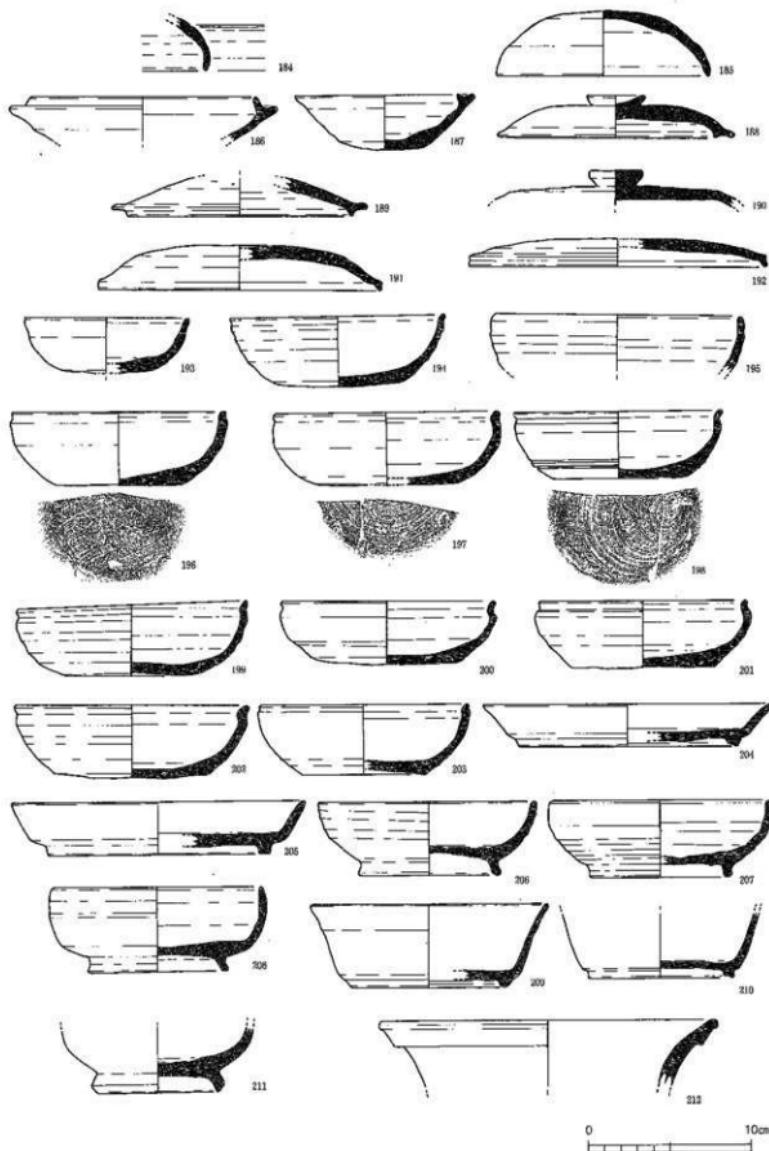


図37 2区 4-1層 出土遺物実測図(2) (1:3)

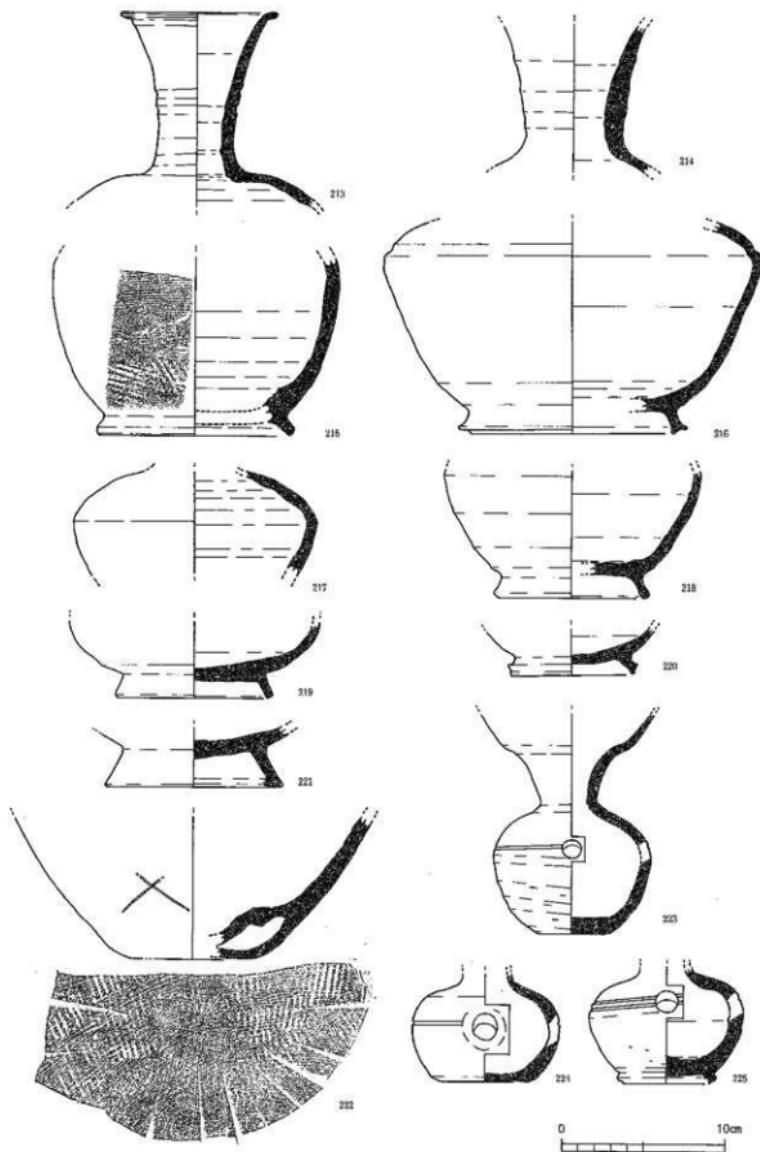


図38 2区 4-1層 出土遺物実測図(3) (1:3)

227は接合部片で、2方向に三角形透かしがある。脚端部は外側に引き出されている。228・229は接合部片で、2方向に切れ目を入れてある。230は脚部片である。2方向に三角形透かしがあり、さらに、切れ目を入れてある。脚端部は指ナデによりつまみ上げられている。231は脚部の破片である。2方向に三角形透かしがある。脚端部は指ナデによりつまみ出されている。232は口縁部が一部欠損しているものの、全体像がよくわかるものである。口径18.3cm、器高11.2cm、底径10.4cmを測る。坏部は内湾気味に立ち上がる。脚端部は指ナデによりつまみ出されている。透かしは1方向に切れ目を入れられているのみである。233は口径約14cm、器高9.2cm、底径8.5cmを測る。透かしは1方向に切れ目を入れられている。

これらの低脚高坏の時期は7世紀頃であろう。

土師器（図40、41・図版19、21）

234～239は甕である。234は口径約26.6cmを測る。底部は欠損している。口縁部は緩やかに外反し、胴部は強く張らない。胴部最大径は約28cmで、器高のほぼ中位に位置する。口縁部は横ナデ、胴部外面はハケメ、内面はケズリが施されている。235は口縁部から胴部上半にかけての破片で、口径約24cmを測る。口縁部内面にもハケメが施されている。236

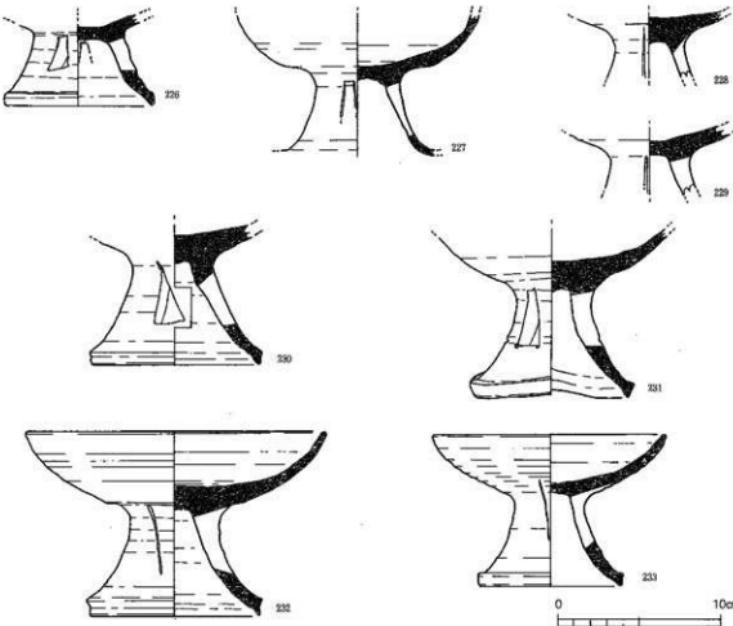


図39 2区 4-1層 出土遺物実測図(4) (1:3)

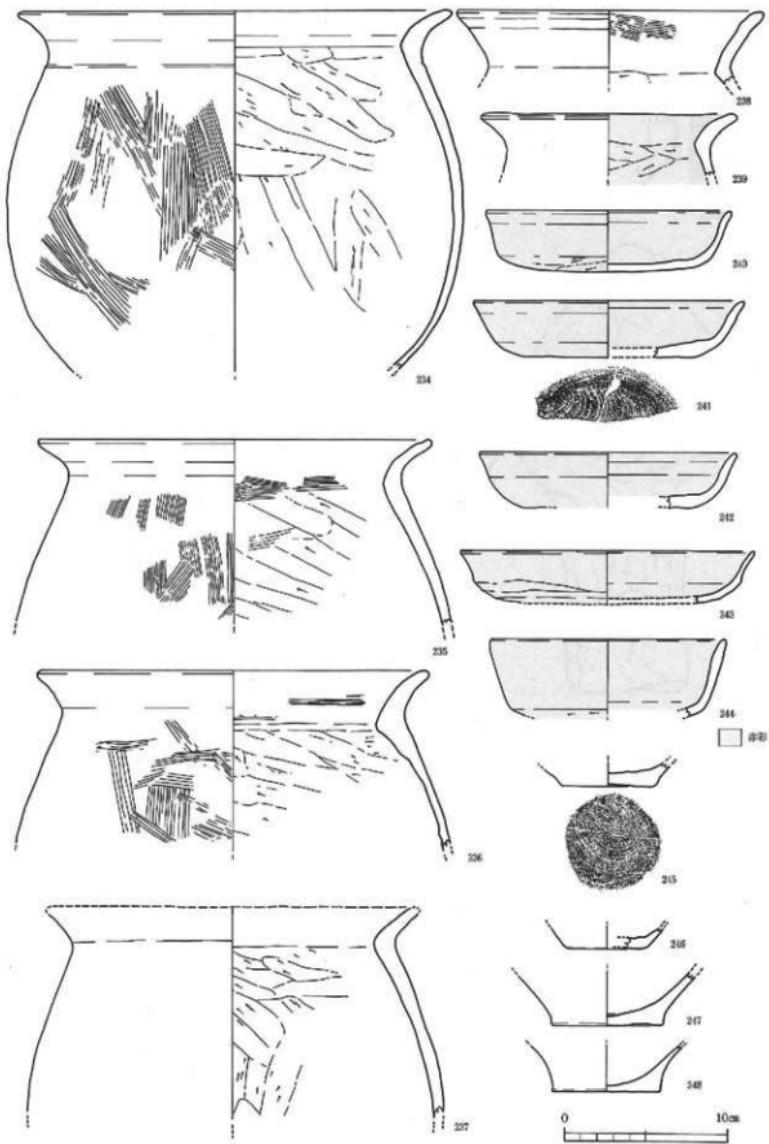


図40 2区 4-1層 出土遺物実測図(5) (1:3)

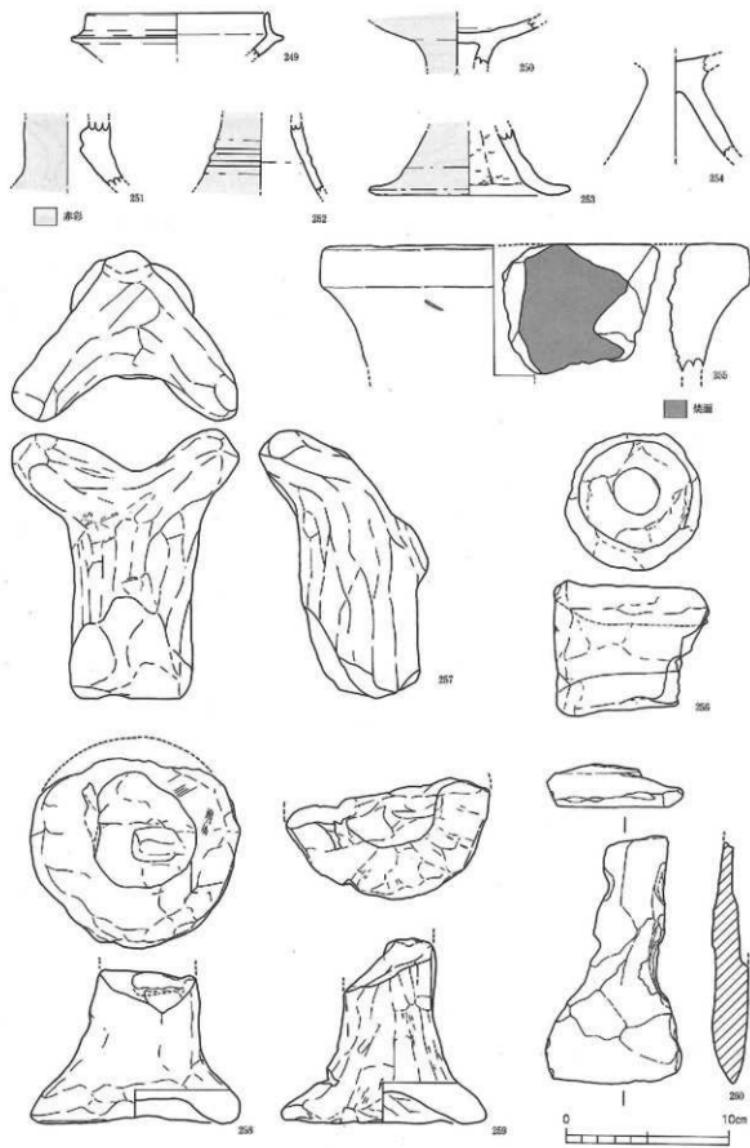


図41 2区 4-1層 出土遺物実測図 (6) (1:3)

は口縁部から胴部上半にかけての破片で、口径約23.8cmを測る。屈曲部内面の稜が強い。237は口縁部から胴部上半にかけての破片で、口径約23cmを測る。口縁端部が欠損している。238・239は口縁部から屈曲部にかけての破片である。

240～244は赤色顔料が施された坏である。240は口縁部は外反して立ち上がる。口径14.9cm、器高3.8cm、底径11.3cmを測る。241は口径16.5cm、器高3.4cm、底径10.4cmを測る。底部には回転糸切り技法がみられる。

244は、口縁部が直線的に立ち上がる。口径14.4cm、器高4.7cm、底径11.8cmを測る。234・244は7世紀～8世紀頃と考えられる。

245・246は中世上師器の底部片である。

249は須恵器の坏身を模倣した土師器である。長いかえりをもつもので、底部は欠損している。口径約13cm。6世紀頃であろう。

250～254は高坏である。250～253は外面に赤色顔料が施されている。250は接合部片である。251・252は脚の筒部片である。251は器壁が厚い。252は器壁が薄く、外面に2条の沈線が施されている。253は脚部片で、裾が真横に開く。254は赤色顔料が施されていない。250～254は6世紀から7世紀頃であろう。

土製支脚・その他（図41・図版20、21）

256はふいごの羽口の破片で、基部の破片である。直径約7.4cm、孔径3.8cmを測る。

257～259は上製支脚である。257は脚部が欠損している。3方向に突起をもつもので、穿孔はない。258は脚部で、突起部は欠損している。破面に非貫通孔の痕跡がある。259は脚部で、突起部は欠損している。

255は釜あるいは土鍋の破片である。口径約26cm、口縁部の厚さは約4cm、胴部の厚さ約1.3cmを測る。口縁部の器壁が厚いため、胴部にかけて急激に器壁が薄くなる。内面はかなり火を受けていて、ざらついている。時期は不明である。

260は撥型をした打製石斧である。刃部は使用により摩耗している。繩文後期～弥生時代前期のものであろう。

（3）4-2層出土遺物

弥生土器・石器（図42・図版24、25）

261は如意形口縁壺の口縁部片である。口縁端部に刻目、胴部上半外面に3条の沈線が施されている。弥生前期後半であろう。

262は上げ底の底部片で、ややくびれて立ち上がる。底径5.4cmを測る。弥生中期後半であろう。

264は無頭壺で、ほぼ完形に近い。口縁部から胴部にかけて「ハ」字状に開き、胴部中央で最大径となる。底部は平底で、くびれて立ち上がる。口縁端部は内外に肥厚され、外面に刻目が施されている。胴部上半には文様がぎっしりと入れられている。上から7条の刻目突帯があり、その上に棒状浮文が施されている。さらにその下には、櫛描き直線文、

波状文、直線文、3条の刻目突帯が施されている。内外面ともに縦ハケメが施され、底部外面にはミガキが施されている。口径14.8cm、胴部最大径38.8cm、底径13.6cmを測る。弥生中期中葉であろう。

263は砾石で、筋状の溝が確認できる。

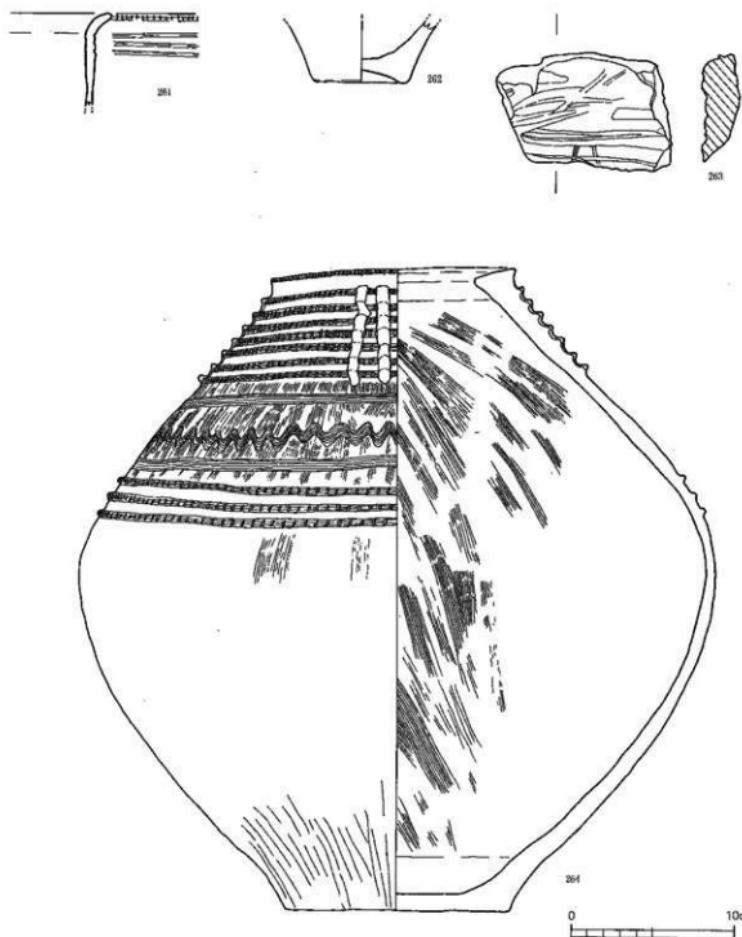


図42 2区 4-2層 出土遺物実測図 (1) (1:3)

須恵器（図43・図版24、25）

265・266は輪状つまみのある蓋である。口縁端部は直角に折れ曲がる。265は口径15.1cm、器高2.8cm。266は口径15.5cm、器高3.6cmを測る。

267は大型の輪状つまみをもった蓋である。端部は折り返されていない。つまみ部分の3方向に穿孔がある。紐を通したのだろう。口径20.3cm、器高5cmを測る。

268・269は高台付の坏である。268は体部が内湾して立ち上がる。高台は底部外周より内側に、「ハ」字状につく。269は口縁部と底部が欠損している。坏部は内湾して立ち上がり、高台は、底部外周に接して直線的につく。

270は高台のつかない坏である。口縁部は欠損している。体部が内湾して立ち上がる。265～270は8世紀のものであろう。

271は低脚無蓋高坏である。坏部は内湾気味に立ち上がる。脚部には2方向に切れ目を入れられている。口径15cm、器高11.5cm、底径9.8cmを測る。

272は鼈の胸部上半の破片である。271・272は7世紀のものであろう。

土師器（図44・図版24、25）

273・274は赤色顔料が施された皿である。273は底部片で口縁部は欠損している。274は口径約19cm、器高3.3cmを測る。

275は高坏で、脚端部が欠損している。外面には赤色顔料が施されている。坏部は内湾気味に立ち上がる。筒部は中実で、脚端部は「ハ」状に広がる。口径約16.6cm、残存14.7cmを測る。

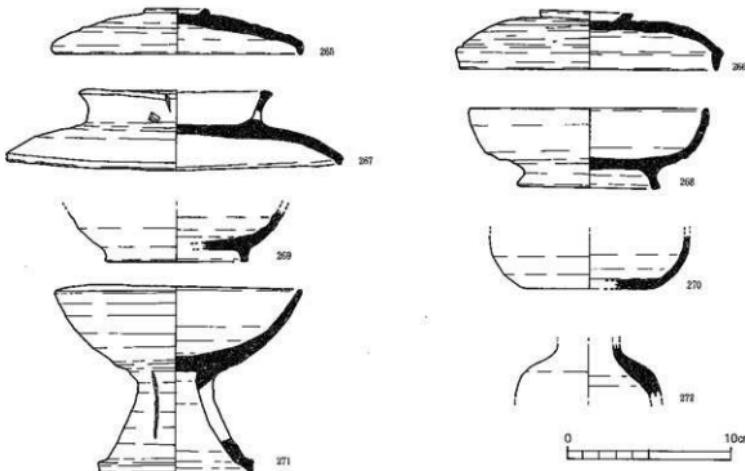


図43 2区 4-2層 出土遺物実測図(2) (1:3)

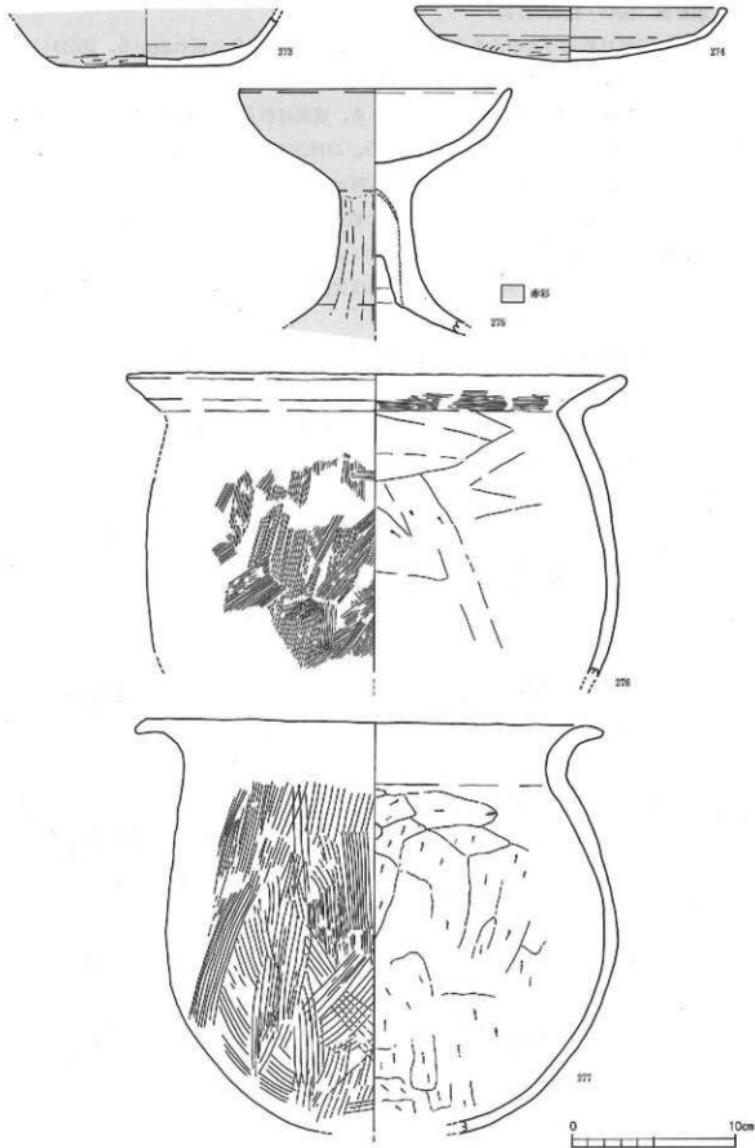


図44 2区 4-2層 出土遺物実測図（3）（1:3）

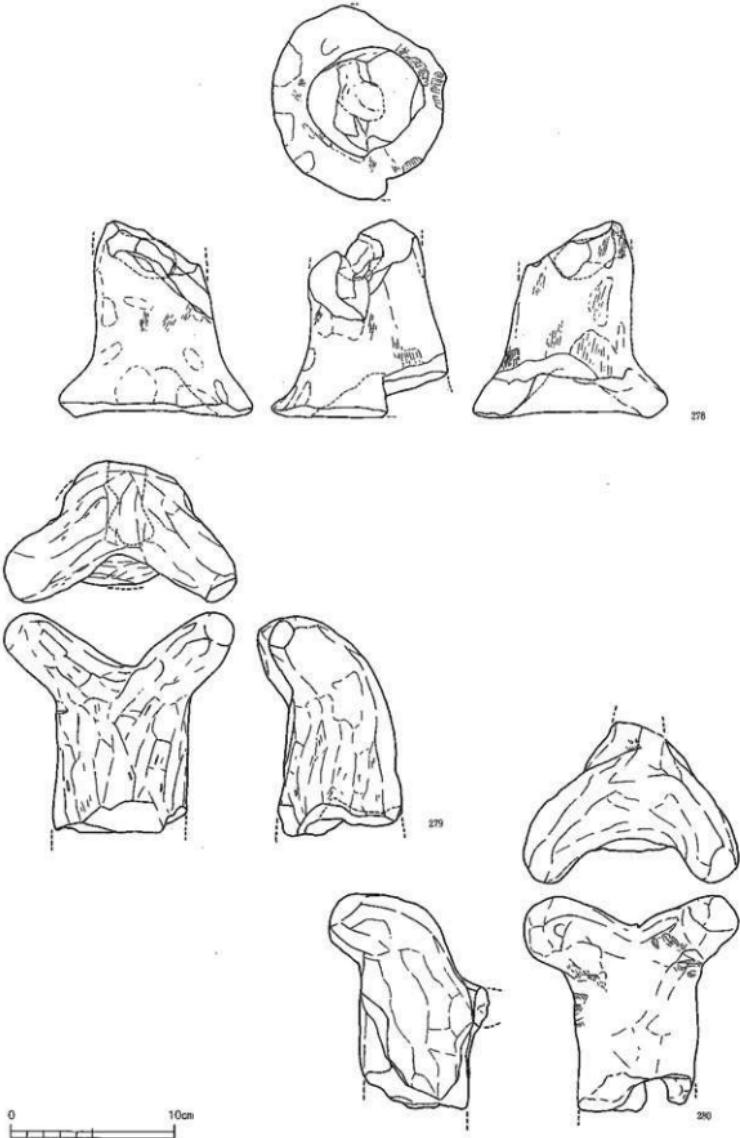


図45 2区 4-2層 出土遺物実測図(4) (1:3)

276・277は甕である。276は口縁部から胴部下半にかけての破片である。屈曲部内面の稜が鋭い。胴部外面に縦ハケメ、口縁部内面に横ハケメ、胴部内面はケズリが施されている。口径約30.7cmを測る。277はほぼ完形で、底部のみ欠損している。口縁部は緩やかに外反し、胴部は球形で、底部は丸底である。口径約28.7cm、器高約25.5cmを測る。

273～277は6世紀～8世紀頃であろう。

土製支脚（図45・図版21、24）

278は突起部が欠損している。体部に非貫通孔がある。279は2方向に突起があるので、脚部は欠損している。体部に非貫通孔がある。280は3方向に突起がある。体部には貫通孔がある。278～280は6世紀～8世紀頃であろう。

(4) 6層出土遺物

6層は、他の調査区では遺物が出上しないと思われていた層であり、かつ、湧水と壁の崩落が懸念され、調査が不可能な層であった。2区では湧水が少なかったため6層の確認ができた。少量であるが、弥生時代前期の遺物が出土した。ただ、2区でもやはり6層を掘削すると湧水が激しく、一部を掘り下げる程度しか調査はできていない。

弥生土器（図46・図版25）

281は壺の胴部上半の破片である。外面には貝殻腹縁による沈線文、羽状文が施されている。内面には指頭圧痕が残る。

282は甕の如意形口縁部片で、口径約40cmの大型品である。外面には5条の沈線が巡る。281・282は弥生前期後葉から末にかけてのものであろう。

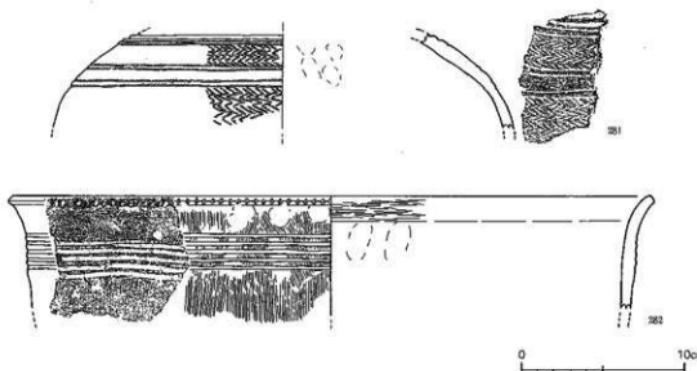


図46 2区 6層 出土遺物実測図 (1:3)

4 まとめ

2区においては11世紀～中世頃の遺構（4層上面、第1遺構面）と古墳時代中期～平安時代頃の石組遺構（6層上面、第2遺構面）が検出された。4層は1-2区、1-3区、4区で検出した旧河道の埋土と考えられ、2区全体が旧河道の中であると推定できる。このことから、この地において安定した地盤が形成され、人々が生活圏として使用できるようになったのは11世紀頃～中世頃であることが推定できる。

4層からは多くの遺物が出土した。特に弥生時代中期後半と7～8世紀の遺物が多く出土した。弥生中期として目につくのは、完形に近い無頸壺である。旧河道の外側に、弥生集落の痕跡があると考えられる。時期は不明であるが、ふいごの羽口が出土している。鍛冶に関係する遺構があった可能性が高い。

1区・3区の状況からは北西側・南西側は地山（6層）が低くなることが推定されるのに加え、2区では東側に行くにつれて地山が高くなっていく状況が認められる。このことから、奈良時代以前の遺構は東側もしくは南東側に存在することが推定される。

粗砂である6層中より弥生前期土器がわずかながら出土するが、須恵器などは認められていないため弥生時代中期以前の堆積層であろう。しかし、その遺物出土量は著しく少なく、湧水も激しいことから、部分的に粗砂層上面から30cm程度掘り下げて調査を終了している。

壱丁田遺跡2区では縄文時代後期前半から弥生時代前期にも生活が営まれていたと推定される。

第5節 3区の調査

3区は東西15m、南北最大23mを測る。2次調査の最も北側である。

1 土層堆積状況（図48）

表土・耕作土の2層を除去すると、第1遺構面である粘質土（3層）が露出する。それ以下の粘砂土（7層）が遺物包含層であり、この下の粘質土上面が第2遺構面（8層）である。第2遺構面では湧水が多く遺構検出は困難を極めた。なお、これ以下は粘質土が厚く堆積している上、遺物が出土しないことから、この段階で調査を終了している。

2 遺構

(1) 第1遺構面（3層上面）（図48・図版13）

溝1・土壤1・井戸1を検出した。遺構は北側1/3の範囲にのみ存在している。

S D 0 9（図版13）

幅約0.6m、深さ約0.1mの東西に伸びる浅い溝状遺構である。遺構断面は緩やかなU字形を呈している。西側ではSK12に接続しており、わずかであるが東へ向かって傾斜している。

S K 1 2（図版13）

調査区の北西角に位置しており規模はわからないが、円形の土壤と推定される。北壁の土層で確認される深さは約0.5mであり、底は平らになっている。南東部でSD09と接続している。

S E 0 2（図版13）

SK12に近接する、平面形は円形で上端では径約1.7mと推定される遺構である。下端は径約0.8mまで小さくなり、深さは0.9m以上を測る。ただし、壁面崩落のためにそれ以上は調査することができなかった。その形状から素掘りの井戸と考えられる。

(2) 第2遺構面（8層上面）（図48・図版12）

溝2・土壤1を確認した。

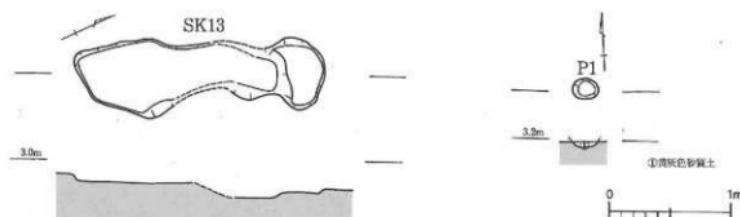
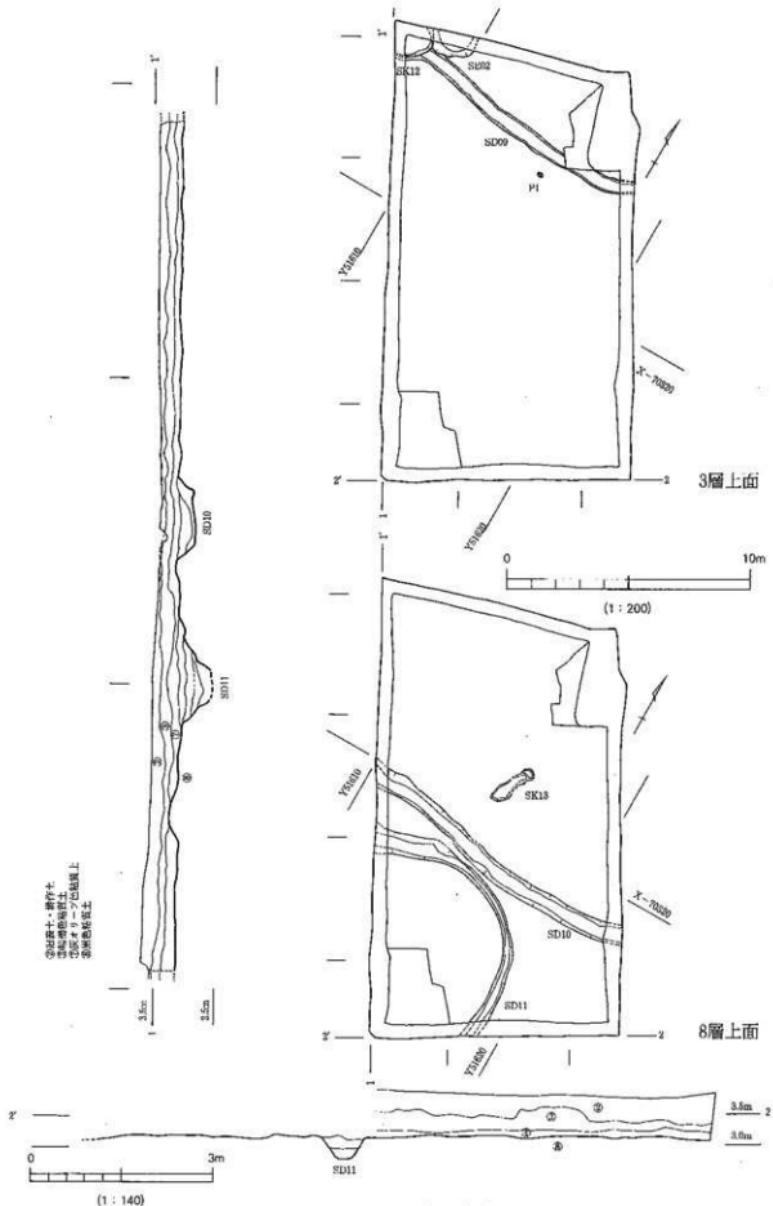


図47 3区 遺構実測図 (1:40)



S D 1 0 (図版12)

ほぼ東西に蛇行しながら走る溝状遺構である。幅約0.9m、深さ0.3mを測り、遺構底は平らになり、レベルは標高2.8mでほぼ一定である。

S D 1 1 (図版12)

幅0.6m、深さは浅い場所で0.1m、西壁部分で最も深く0.5mを測る。西壁・南壁部分で遺構外に延びていくため、明確ではないが円形に廻る可能性がある。遺構底はU字形を呈するが、レベルは一定でない上、一方向に傾斜する傾向もみられない。

S K 1 3 (図47)

南北2.0m、最大幅0.7mの不整形な土坑である。深さは10cm程しかなく、自然な産みである可能性もある。

3 出土遺物

4層からはコンテナ1/3箱分の遺物が出土した。しかしながら風化が激しく器種・器形ともに不明なものがほとんどである。4層から出土した遺物の中には胎土の様子から弥生土器と思われる遺物も含まれている。

4 まとめ

遺構分布の状況から当調査区は3次調査区域の東端部であることが推定される。そして、3区は2次調査地点の1区、2区、4区とは土層堆積状況が異なることがわかった。

遺構は、3層上面、8層上面で検出することができたが、詳細な時期は遺物が出土していないため不明である。

第4章 総括

壺丁田遺跡はこれまで3次の調査が行われている。本書はその2次調査の報告書である。今回の調査成果を時期ごとにまとめてみたい。

第1節 繩文後期～弥生前期

1 繩文後期前半から弥生前期の土器

2区・4区から縄文後期前半の中津式土器が出土した。これらは2次堆積した包含層資料である。この資料の出土により当地が、縄文後期前半までには陸地化し、生活が可能な状況で

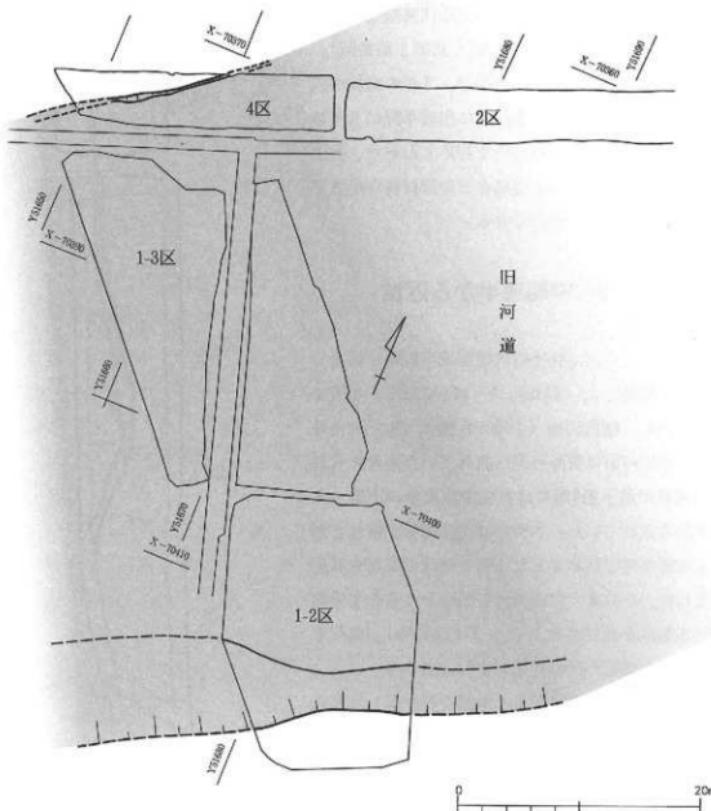


図49 旧河道実測図 (1:400)

あったことがわかる。この陸地化は三瓶角井降下火山灰によるもので、出雲平野でも弥生時代の遺構の下層に縄文前期末から後期の遺構が存在する可能性がより高くなつたと考えられる。今後の調査では、可能であれば現状より下層の発掘を考慮して調査する必要があるだろう。

弥生前期の土器は、1-3区、4区、2区から少量であるが出土している。2区では2次調査区の基盤層と考えていた6層からも出土した。

2 花粉分析

4区6層の花粉分析の結果、縄文時代晚期頃にスギ属が卓越することがわかつた（第5章第2節参照）。調査区付近は、神戸川扇状地末端で、スギの森林が広がっていたと考えられる。当該期に出雲平野にスギの森林があったことが今回の分析で初めてわかり、弥生時代の遺跡から出土する木製品などの原材料を山雲平野内で獲得していたと推定できる。

第2節 弥生時代中期後半から近世

1 遺構と遺物

1区、2区、4区で弥生時代中期後半以降に埋まつた旧河道を確認した（図49）。1-2区で左岸、4区で右岸を検出し、幅約50m（下端の距離）、深さ1.2mを測る。この旧河道は東から西へ流れていると考えられる。旧河道の最下層5層には弥生中期後半の上器や木製品が包含されていた。木製品は建築部材や杭などが多く、出雲平野で初めてとなる弥生時代の鳥形木製品も出土した。その後、市内の矢野遺跡からも弥生後期の鳥形木製品が確認されており（平成17年）、鳥形木製品を使った祭祀が行われていたのであろう。

その後、この旧河道は侵食と堆積を繰り返しながら埋没したと考えられる。4区では、数回の浸食があったことを土層断面で確認した。しかし、平面での分層発掘は困難で、遺物は時期が混在した状態で取り上げざるをえなかつた。そのため、土層の年代を把握す

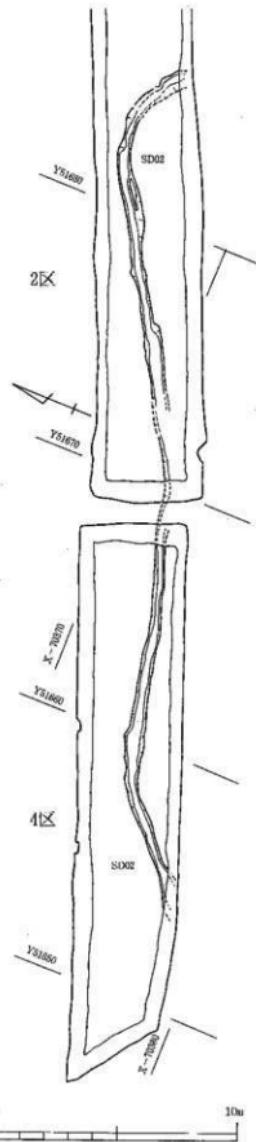


図50 SD02実測図 (1:200)

る目的で、土壤を試料としたAMS年代測定法を実施した。残念ながら、4層自体の分析が実施されていない。実施したのは、2層、4層に掘り込まれたSD02埋土、4層との関係が不明なSD03埋土である。分析の結果、SD03は古墳時代中期～後期、SD02は古代から中世、2層は近世の値が示されている。発掘調査では、4層から6世紀、7～8世紀、11世紀以降の大きく3時期の土器が出土している。6世紀のものはSD03に伴う可能性がある。7～8世紀は4層に伴い、11世紀のものはSD02に伴う可能性が考えられる。旧河道の埋没過程を推測すると、弥生時代中期後半に埋没が始まり、古墳時代後期にSD03により浸食され、7～8世紀までにはほぼ旧河道が埋没したと推定できる。そして、11世紀以降中世にかけてSD02や2区で検出した遺構が掘り込まれているのであろう。そして、近世に2層の下部（旧耕作上）が堆積したと考えられる。

SD02は2区、4区で確認した（図50）。東西方向の溝で蛇行しており、長さ約24mを測る。遺物は、7～8世紀のものが多く出土している。調査区ではその時代の明確な遺構は確認できていないが、屯田遺跡のなかでも重要な時期となるであろう。この時期の特徴的な遺物としては4区から出土した軒丸瓦である。神門寺境内廐「F II」の水切り瓦と同范である。しかし、この1点のみの出土であるため、近辺に瓦葺建物が存在した可能性は低いと考えている。この瓦を評価し、屯田遺跡の性格を考えることは難しく、今後の発掘調査を待たなければならない。

また、明確な時期は不明であるが、4区及び2区からふいごの羽口が出土している。鍛冶に関係する遺構があったと考えられる。

近世の堆積上を花粉分析した結果、調査区付近ではワタやソバ、ソラマメが栽培されていたようである。

以上のように今回の2次調査では、縄文後期から近世までに断続的な居住空間が調査区の近くにあったと推定される。

2 土製支脚について

6世紀末～8世紀にかけての、煮沸用具の一つとして土製支脚を使用するのは、山陰中央部（旧出雲国・伯耆国）の特徴と言われ、岩橋孝典が継続的に研究を行っている（岩橋2003、2004、2007）。岩橋は出雲平野の土製支脚を検討し、神戸川左岸と右岸で型式差があることを指摘した（岩橋2007）。すなわち、旧神戸川左岸ではすべてが2方向突起のI類であるのに対し、神戸川右岸ではI類に3方向突起のII類が加わっていることを示した。

屯田遺跡は神戸川右岸の神門郡高岸郷に位置すると推定される。岩橋の報告時点では資料が少なく、高岸郷にはI類が2点あるのみで、詳細が不明な地域であった。今回の屯田遺跡2次調査では、I類が6点、II類が5点出土した。その結果、高岸郷での総数は、I類が8点（約62%）、II類が5点（約38%）となった。したがって、高岸郷は土製支脚I類を主体とし、II類がそれに加わる地域であるとわかり、神戸川を境にした、土製支脚の地域性がより明確となった。

第3節 壱丁田遺跡の評価

1次調査の範囲では、古墳時代前期～近世までの遺構・遺物が出土している。1次調査で注目されるのは、近世墓地が確認されたことである。

3次調査の範囲では、古墳時代から近世までの遺構・遺物が出土している。3次調査で注目されるのは、近世墓や古墳時代の埴輪や須恵器の器台が出土したことである。調査区周辺に古墳の存在が考えられる。

2次調査と1次、3次調査の相違点は、2次調査地から縄文後期前半～弥生時代の遺物が出土したことである。この時期に壹丁田に人が住みはじめたことがわかる。2次調査範囲では、約50m幅の旧河道が西に流れていた。そして、古墳時代になると、生活範囲を南北に広げ、奈良時代に隆盛期を迎えている。その後、近世には墓地や畠などに利用されるようになったことがわかる。壹丁田遺跡の3回にわたる調査で、神門水海岸部の集落の様子が少しずつわかつてききた。まだ、不明な点が多いため、今後の調査・研究により、出雲市の歴史を解明していきたい。

【参考文献】

- 出雲市教育委員会編1985『神門寺境内廐寺』
出雲市教育委員会編1998『壹丁田遺跡発掘調査報告書』出雲市駅前白枝線街路事業地内
出雲市教育委員会編2002『海上遺跡』出雲市民病院移転予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
出雲市教育委員会編2006『壹丁田遺跡第3次発掘調査報告書』出雲市白枝北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
岩橋孝典2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について（1）」『古代文化研究』第11号、島根県古代文化センター
岩橋孝典2004「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について（2）」『古代文化研究』第12号、島根県古代文化センター
岩橋孝典2007「煮焚き具からみた古代出雲平野の地域性—出雲西部土製支脚考—」『出雲風土記の研究Ⅲ 神門水海北辺の研究（論考編）』島根県古代文化センター
島根県教育委員会編1988『西川津遺跡発掘調査報告書IV（海崎地区2）』
島根県教育委員会編1998『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5
島根県教育委員会2006『中野清水遺跡（3）白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 7
島根県教育委員会編2007『余小路遺跡・小畠遺跡』一般国道出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 8
妹尾周三1993「寺町廐寺式軒丸瓦の伝播—備後寺町廐寺と出雲神門寺境内廐寺—」『島根考古学会誌』第10集（10周年記念特集）、島根考古学会
松下正司1969「備後北部の古瓦—いわゆる水切瓦の模相」『考古学雑誌』第55巻第1号
松下正司1993「水切瓦再考」『考古論集』塩見清先生退官記念論文集

第5章 分析編

第1節 出雲市壱丁田遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1 試料

試料は出雲市壱丁田遺跡から出土した建築部材3点、用途不明品2点の合計5点である。

2 觀察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（針葉樹3種、広葉樹1種）の表と顕微鏡写真（図版26）を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

遺物37 (図11)、42 (図12)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

遺物50 (図14)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) ヒノキ科クロベ属クロベ (*Thuja standishii* Carriere)

遺物47 (図13)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に2~6個ある。放射柔細胞の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造（インデンチャー）ができる、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全

て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州、四国に分布する。

4) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

遺物49(図13)

放射孔材である。木口では午輪に関係なくまちまちな大きさの道管 ($\sim 200\mu\text{m}$) が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1~3細胞幅の独立帶状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で櫛状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆大1988『日本の遺跡山土木製品総覧』雄山閣出版
島地 謙・伊東隆大1982『岡脱木材組織』地球社
伊東隆大1999『日本庭園樹木の解剖学的記載 I ~ V』京都大学木質科学研究所
北村四郎・村田 審1979『原色日本植物図鑑木本編 I・II』保育社
深澤利三1997『樹体の解剖』海青社
奈良国立文化財研究所1985『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』
奈良国立文化財研究所1993『奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

表1 出雲市若丁田遺跡出土木製品同定表

遺物番号	品名	樹種
37	板材	スギ科スギ属スギ
42	板材	スギ科スギ属スギ
47	板材	ヒノキ科クロベ属クロベ
50	木製品	ヒノキ科アスナロ属
49	木製品	ブナ科コナラ属アカガシ亜属

第2節 壱丁田遺跡発掘調査に係る花粉分析及びAMS年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

1 はじめに

壹丁田遺跡は、島根県東部の出雲市白枝町地内に位置する。また、神戸川の旧河道の1つと考えられる南北方向の微高地上に立地する（図51）。

発掘調査の結果、遺跡内で幾つかの旧河道が切り合う様子が確認され、出土遺物も再堆積を繰り返していることが予想された。本報は、各旧河道の埋積時期の推定、及び出雲平野での近世の農耕について詳細を明らかにする目的で、出雲市文化観光部文化財課が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した調査報告書の概報である。



図51 遺跡の位置（出雲平野の等高線図）

2 分析試料について

図51に示す調査トレンチ内3か所で分析（測定）試料を採取した。各地点の模式柱状図及び試料採取基準を図53～55の花粉ダイアグラム中に示す。



図52 試料採取地点の配置

3 分析方法

(1) AMS年代測定方法

試料に酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、石墨（グラファイト）に調整し、加速器質量分析計（AMS）を用いて測定を行った。

(2) 花粉分析

処理は渡辺（1995）に従って実施した。プレバラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村（1974）に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

4 分析結果

(1) AMS年代測定結果

表2に $\delta^{13}\text{C}$ 、補正 14C 、曆年較正用年代、曆年較正年代を示した。補正 14C は、リビーの半減期（5568年）を用いるとともに、 $\delta^{13}\text{C} = -25\%$ となるように補正・算出した曆年較正用年代を、5年単位で丸めた値である。これらの年代は、西暦1950年からさかのぼった年代値である（誤差を 1σ ：68.2%領域で示す）。曆年較正年代は、曆年較正年代を曆年較正データ（INTCAL04）を用いて、Oxcal Ver3.1により較正したものである。また、図3～5の各花粉ダイアグラム中の柱状図には、補正 14C 値と層準を示している。

(2) 微化石概査結果

花粉分析用プレバラート、及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果を、表2に示した（植物片、炭は花粉分析用プレバラートを観察した。珪藻、火山ガラス、プラント・オパールは、花粉分析処理の残渣を観察した）。

(3) 花粉分析結果

分析結果を図53～55の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。一方、花粉化石の含有量が少なく、十分な量の木本花粉が検出できなかった試料では、検出できた種類を「*」で示した。また、右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積百分率として示した。

5 花粉分帶

花粉分析の結果を基に局地花粉帯を設定した。以下に各局地花粉帯の特徴を示す。本文中では花粉化石群集の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

① III带（No.1地点試料No.4）

表2 AMS年代測定結果

試料	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C 年代(yrBP)	曆年較正年代		測定番号 (PLD-)	
			1σ曆年代範囲	2σ曆年代範囲		
1 (ITT-1) 北壁東 6層 乾燥	-24.97±0.21	2615±20	2614±22	BC810-790(68.2%)	BC815-770(95.4%)	8922
2 (ITT-2) 東壁 腐植土 乾燥	-27.76±0.25	1570±20	1568±21	AD430-540(68.2%)	AD420-550(95.4%)	8923
3 (ITT-3-1) 北壁西 腐植土 乾燥	-21.17±0.23	2105±20	2103±22	BC170-90(68.2%)	BC200-50(95.4%)	8924
4 (ITT-3-2) 北壁西 腐植土 乾燥	-20.31±0.20	2090±20	2092±21	BC170-50(68.2%)	BC180-40(95.4%)	8925

表3 微化石概査結果

地点名	試料番号	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラント・オパール
No.1 地点	1-1	◎	△	△	◎	○	◎
	1-2	△×	◎	△×	△×	○	◎
	1-3	△×	◎	△×	△×	◎	◎
	1-4	◎	○	△×	○	○	○
No.2 地点	2-1	◎	◎	△×	○	△	○
	2-2	○	◎	△×	△	○	○
No.3 地点	3-1	△	△	△×	△	△	○
	3-2	△	◎	△×	△	△	○

凡例 ◎：十分な数数量が検出できる
△×：極めてまれに検出できる

○：少ないと検出できる

×：検出できない

△：非常に少ない

スギ属が卓越し、コナラ亜属、アカガシ亜属、トチノキ属を伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン未満)、孢子ではオジダ科-チャセンシダ科が外の種類に比べ高い出現率を示す。

② II带 (No.2 地点試料No.2、1)

スギ属、マツ属(複維管束亞属)が卓越傾向にある。下位の試料No.2ではスギ属の出現率がマツ属(複維管束亞属)に比べ高く、上位の試料No.1ではマツ属(複維管束亞属)の出現率が高い。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、イネ科(40ミクロン未満)、ヨモギ属、アカザ科-ヒュ科が高率を示すほか、栽培種のソバ属が低率であるが検出される。

③ I带 (No.1 地点試料No.1)

マツ属(複維管束亞属)が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)が卓越するほか栽培種のソバ属、ソラマメ属、ワタ属などが低率ではあるが検出される。

6 遺跡の成立過程

(1) 各層の堆積時期

図51に、今回の分析試料と同時期の試料について花粉分析が実施されている、壱丁田遺跡近辺の主な遺跡を示す。これらの内、余小路遺跡(渡辺、2008)では近世の堆積物を対象とした花粉分析が行われている。三田谷遺跡(渡辺、2000)では、古代以降現代までの花粉分析が行われている。また、小畠遺跡(渡辺、2007)では、2505±35yrBP(縄文時代晩期から弥生時代前期ごろ)の¹⁴C年代が得られている基準で、花粉分析が行われている。以下では、AMS年代値と花粉化石群集の対比から、各層の堆積時期を推定する。

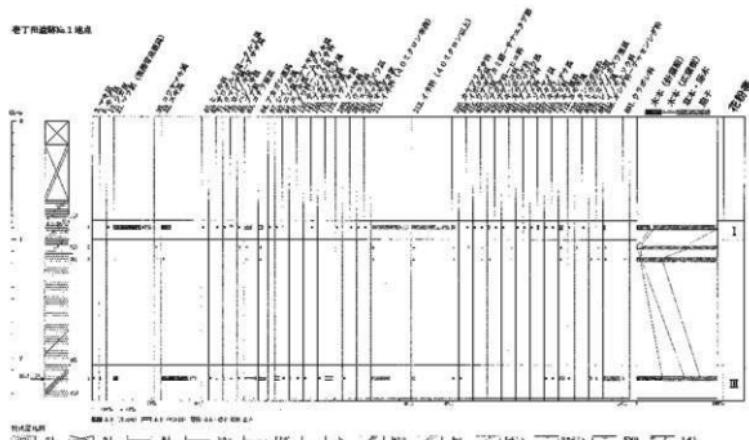


図53 No.1地点の花粉ダイアグラム

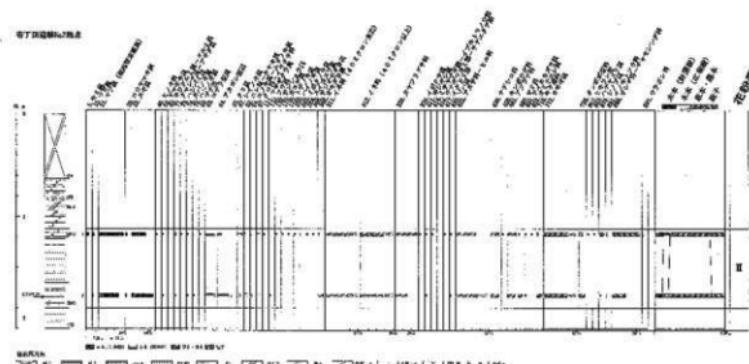


図54 No.2地点の花粉ダイアグラム

① 6層

6層最下部から 2615 ± 20 yrBPのAMS年代が得られている。一方、屯丁山遺跡北に位置する小畑遺跡では、 2505 ± 35 yrBP（縄文時代晩期から弥生時代前期ごろ）の ^{14}C 年代が得られ、同層準で花粉分析が行われている（渡辺はか、2007）。小畑遺跡の花粉化石群集の特徴は、スギ属が卓越し、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴うなど、今回得られた屯丁山遺跡の花粉帯Ⅲ帶に類似する。このように、得られたAMS年代と花粉化石群集の関係が

一致することから、今回得られたAMS年代測定値の妥当性は高いと考えられる。

6層最上部は古土壤と考えられる腐植質粘土からなる。ここからは弥生時代前期から中期の年代値(2105 ± 20 yrBP)が得られている。また、6層上面からの削り込みを埋めたSX01からは、 2080 ± 20 yrBPの年代値が得られている。これらのことから、6層は、縄文時代晚期以降弥生時代中期ごろまでに堆積したと考えられる。

② SD03

No.2地点(東壁)で、古墳時代中期～後期(1570 ± 20 yrBP)の年代値を示す河道(SD03)が観察された。花粉化石群集では、No.2地点試料No.2(SD03)と試料No.1(SD02)の間でマツ属(複維管束亞属)とスギ属の間で最も高率を示す種類が交代する。一方、三田谷I遺跡(渡辺, 2000)でマツ属(複維管束亞属)とスギ属の間で最も高率を示す種類が交代する時期は古代から中世の間である。これらのことから、SD02埋上が、古代から中世の間で堆積したと考えられる。

③ 2層中部(No.1地点試料No.1層準)

2層中部(No.1地点試料No.1層準)の花粉化石群集は、マツ属(複維管束亞属)が卓越し、スギ属、コナラ並属を伴うなど、余小路遺跡(渡辺, 2008)で得られた近世の花粉化石群集と類似する。このことから、2層中部は近世に堆積した可能性が高い。

(2) 堆積過程

6層は腐植質粘土と中粒砂の互層である。また下位には粗砂が続くと考えられ、河道内、あるいは後背湿地内で堆積したものと考えられる。

6層上部は砂がちの単層が重なるが、層内には明確な堆積構造が認められなかった。また、6層最上部No.3地点試料No.1層準の微化石概査結果で示したように、花粉粒の外、微粒炭、植物片、プラント・オパールの含有量も少ないとなどから、洪水成堆積物である可能性が指摘できる。一方、6層上面は遺構面と認識されており、微粒炭の含有量が少ないものの土壤化を受けていると考えられる。したがって、6層上面が自然堤防などの微高地を成していた可能性もある。また、SX01は、自然の河川のほか溝などの人工物である可能性も指摘できる。

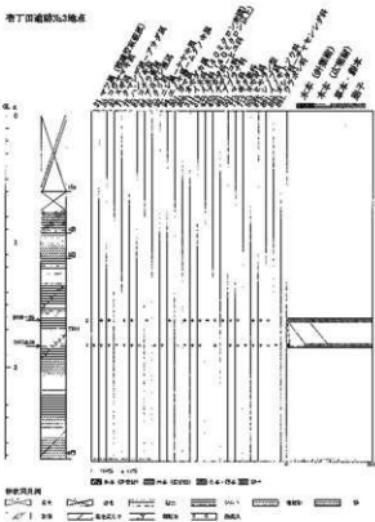


図55 No.3地点の花粉ダイアグラム

6層上面はしばらくの間安定していたと考えられるが、弥生時代中期には河川の浸食・堆積が頻繁に起こるようになり、遺物が二次堆積を繰り返すようになる。このため、異なる時期の河川跡を判別することが困難になるとともに、一つの河川跡から幅広い時期の遺物が検出されたと考えられる。No.2地点（東壁）では、古墳時代中期～後期（1570±20yrBP）の河道（SD03）が観察されたほか、古代から中世の間で堆積した溝（SD02）も観察できた。

2層が水平堆積を成し、広く分布する。また、イネなどの栽培植物の花粉化石が多量検出される。これらのことから、近世になると遺跡内は広く耕地で覆われ、遺跡内を流れている河道は小さな溝（SD01：用水路？）として痕跡を残すようになったと考えられる。

7 古環境復元

以下では、花粉分析結果などを基に、遺跡近辺での古環境について述べる。

(1) 縄文時代晚期（局地花粉帶：Ⅲ帶）

前述のように、調査地点は河道内、あるいは後背湿地内であったと考えられる。また図51に示したように、壱丁田遺跡は小畑遺跡と同じ、神戸川扇状地末端の舌状の微高地に位置している（この微高地は、自然堤防あるいは自然堤防を含む廃棄河川そのものである可能性がある）。両遺跡ともに花粉化石群集ではスギ属が卓越し、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴うことから、調査地近辺には現在富山平野の扇状地末端に残存し、伏流水の豊富な旧河道上に発達する「杉沢の沢スギ」のような森林が見られたと考えられる。カシ類や、ナラ類はこの森に混生していたか、あるいは背後の丘陵から中国山地にかけて分布していたと考えられる。また、水際にはアシなどイネ科の草本が繁茂し、微高地上の開けた場所にはヨモギ類などが繁茂していたと考えられる。

(2) 弥生時代前期から中期

前述のように、No.3地点試料No.1、2では、花粉粒だけでなく、微粒炭、植物片の含有量も少なかった。また、プラント・オパールの含有量はやや少なかった。このような微化石含有量の特徴は、堆積速度が速い場合にしばしば認められる。さらに、砂がちであるが堆積構造が認められないなど、洪水に伴う堆積物である可能性が高い。

6層上面は遺構面と認識されており、微粒炭の含有量が少ないものの土壤化を受けていると考へられる。したがって、6層上面が自然堤防などの微高地を成していた可能性もある。また、SX01には、自然の河川のほか溝などの人工物である可能性も指摘できる。

(3) 古墳時代～古代・中世？（局地花粉帶：Ⅱ帶）

この時期は、遺跡内で河川の浸食・堆積が繰り返し起こっていたと考えられる。一方、遺跡近辺では草地や耕作地が広がり、耕作地ではイネやソバなどの栽培が行われていたと考えられる。堆積時期から判断してイネは水田で栽培されていたと考えられるが、今回の花粉分析結果のみでは判断することができなかった。遺跡近辺には、縄文時代から続いてスギ林が残存していた可能性もある。マツ属（複維管束亜属）は、山地部で二次林として

発達するアカマツ林に由来すると考えられるが、砂丘上や海岸に発達するクロマツ林に由来する可能性もある。

(4) 近世（局地花粉帶：I 帯）

前述のように遺跡内には耕地が広がっていたと考えられる。イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現するほか、水田雑草であるオモダカ属やカヤツリグサ科、セリ科などの水田雑草を含む分類群が多數検出され、耕地が水田であった可能性が高い。このほか、ソバ属、ワタ属などの栽培植物や、栽培植物に由来する可能性のあるソラマメ属が検出される。これらは、水田の裏作や畦を利用して栽培されていたと考えられる。また、休耕田を利用した畑で栽培されていた可能性もある。

卓越するマツ属（複維管束葉属）は、背後の丘陵から中国山地、あるいは北山山地に分布するアカマツ林や、浜山砂丘などに分布するクロマツ林に由来すると考えられる。

8 まとめ

壱丁田遺跡発掘調査に伴う¹⁴C年代測定及び花粉分析から、以下の事柄を考察した。

- (1) 局地花粉帶Ⅲ帯～I 帯を設定した。
- (2) ¹⁴C年代測定及び出土遺物から、それぞれの花粉帶の示す時期は以下のように推定された。
I 帯：近世 II 帯：古墳時代中期～中世 III 帯：縄文時代晚期
- (3) 弥生時代中期以降中世ごろまでの間には、河川の浸食・堆積が頻繁に起こった。
- (4) 壱丁田遺跡近辺の遺跡での花粉分析結果との比較を行い、既知の分析結果と矛盾ないことが明らかになった。特に、以下の事柄は、重要である。
 - ① 縄文時代晚期に、調査地点近辺にスギ林が分布した。調査地点は神戸川扇状地上末端近くに位置する河川あるいは後背湿地内であったと考えられる。
 - ② 近世には調査地を含む地域で、ワタが一般的に栽培されていたと考えられる。この外、ソバ、ソラマメなどが栽培されていたと考えられる。

参考文献

- 中村 純1974「イネ科花粉について、とくにイネを中心として」『第四紀研究』13
文化財調査コンサルタント株式会社（2007）余小路遺跡発掘調査に伴う土質分析委託業務報告書
渡辺正巳1995「花粉分析法」「考古資料分析法」 ニュー・サイエンス社
渡辺正巳2000「三田谷 I 遺跡 c 区発掘調査に係る花粉分析」『三田谷 I 遺跡－塩冶299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』出雲市教育委員会
渡辺正巳・山田和芳・市原季彦2007「小畑遺跡発掘調査におけるジオスライサー調査」『余小路遺跡・小畑遺跡－一般国道9号山雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8-1』島根県教育委員会
渡辺正巳2008「花粉分析の成果報告」『余小路遺跡報告書』



壺丁田遺跡遠景（北から）



1-3区 5層 木製品出土状況（南から）

1-3区
木製品出土状況
(南東から)



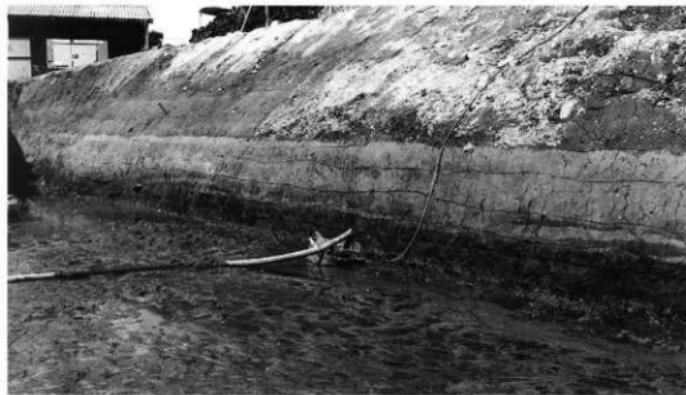
1-3区
木製品出土状況
(南から)



1-3区
完掘状況
(北西から)



図版3 1-3区 調査状況



1-3区 東壁
(南から)



1-3区 東側
完掘状況
(南東から)



1-3区
旧河道埋土
(東から)

1-2区
旧河道左岸
(西から)



1-2区 SK01
(東から)



1-1区
完掘状況
(南西から)



図版5 1-3区 木製品出土状況



1-3区 木製品出土状況



1-3区 木製品出土状況



1-3区 木製品出土状況



1-3区 木製品出土状況



4区 SD01
(南西から)



4区 SD02
検出状況
(南西から)

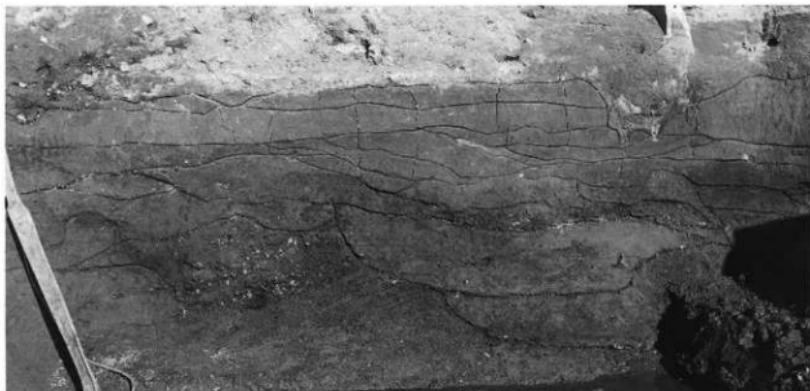


4区 SD02
(南西から)

図版7 4区 調査状況



4区 旧河道右岸（北東から）



4区 東壁土層



4区 北壁 SX01



4区 北壁 旧河道右岸

4区 SE01
(西から)



4区 SE01
(北東から)



4区 完掘状況
(南西から)



図版9 2区 調査状況



2区 調査区 西半 (北東から)



2区 調査区 東半 (北東から)



2区 石組遺構 (南西から)



2区 石組遺構 (北から)



2区 SD02
(南西から)



2区 A7,B7Gr
土層 (西から)



2区 SD04
土層 (西から)

図版11 2区 調査状況



2区 SD04
土層 (南西から)



2区 A10, B10Gr
土層 (南西から)



2区 SK06
(北から)

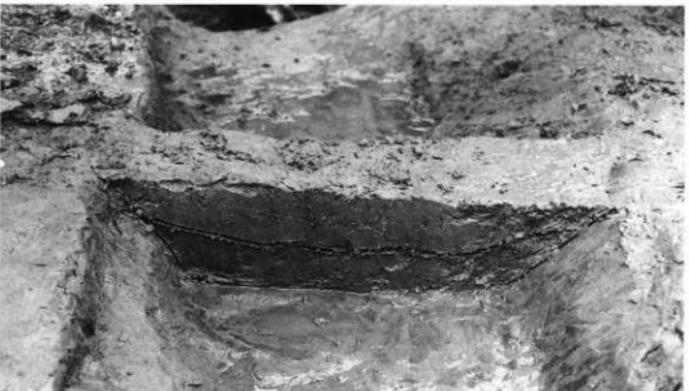
3区 完掘状況
(西から)



3区 完掘状況
(東から)



3区 SD10
土層 (東から)



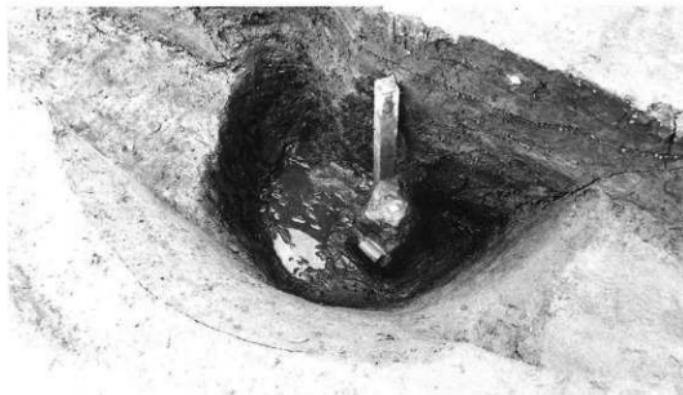
図版13 3区 調査状況



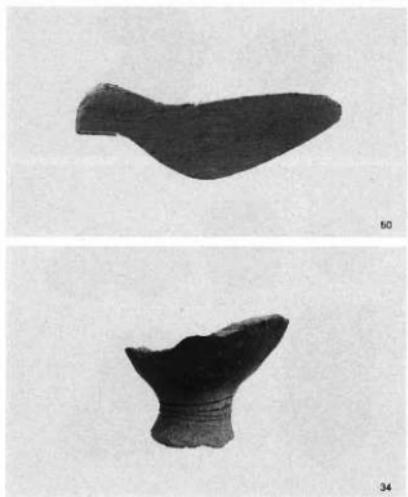
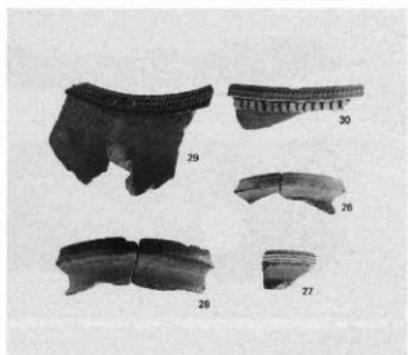
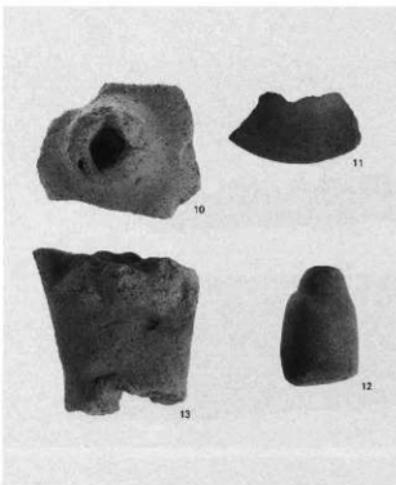
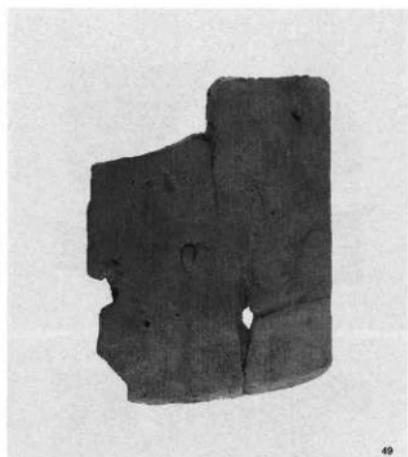
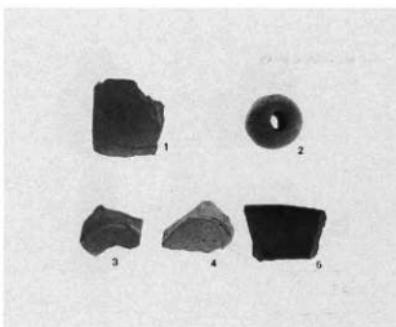
3区 SD09
(東から)



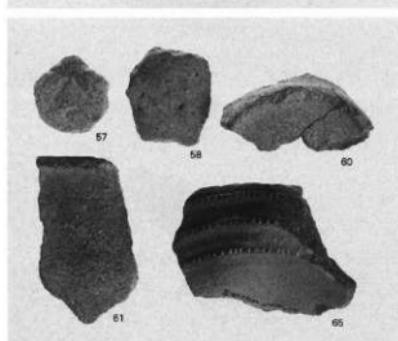
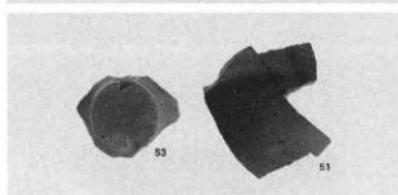
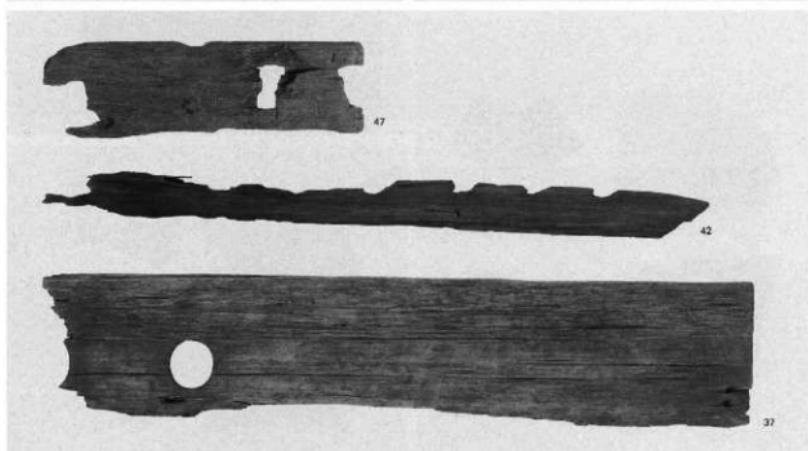
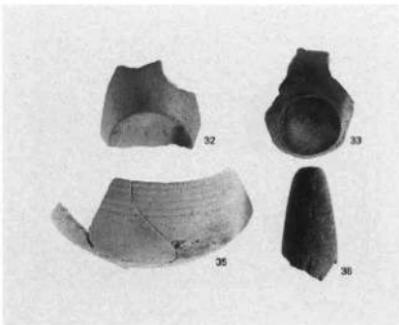
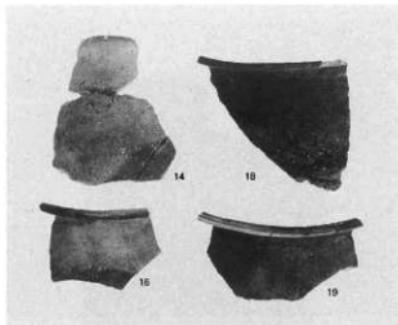
3区
SK12, SE02
(南東から)

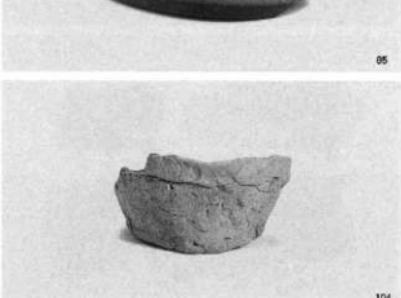
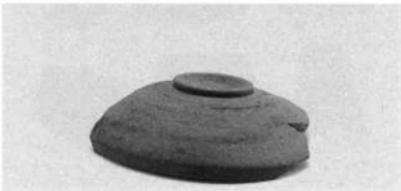
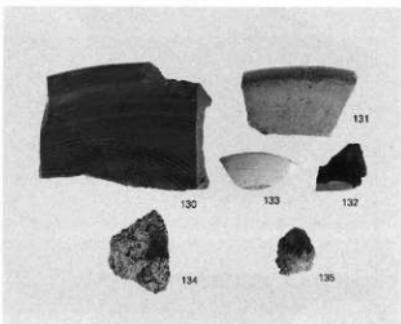
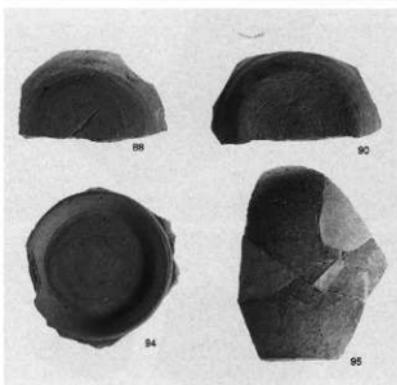
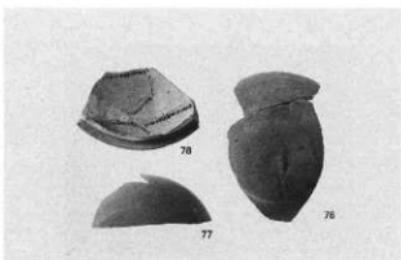
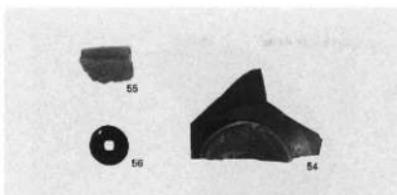


3区 SE02
(東から)

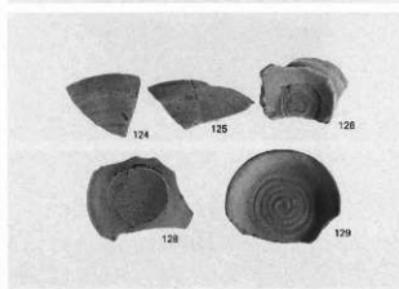
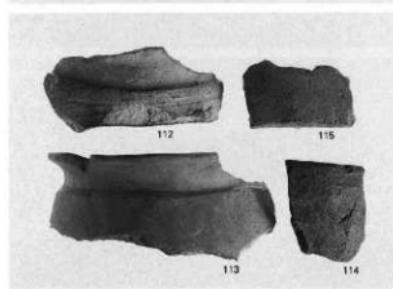
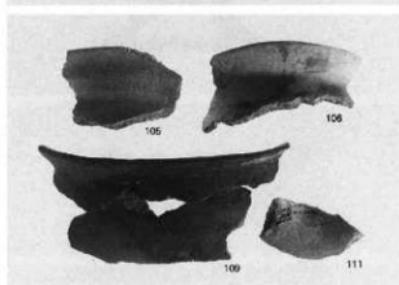
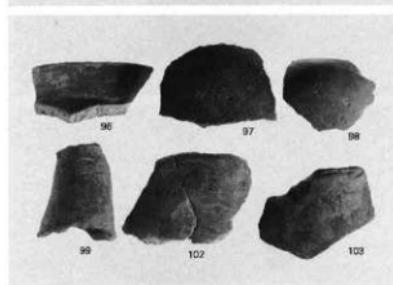
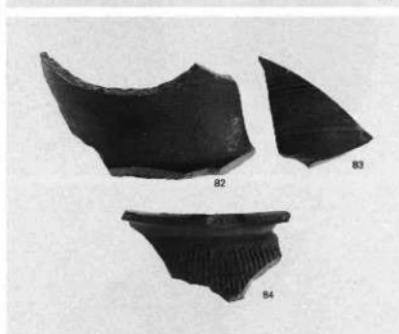
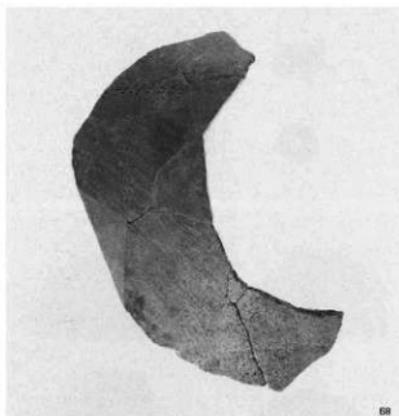
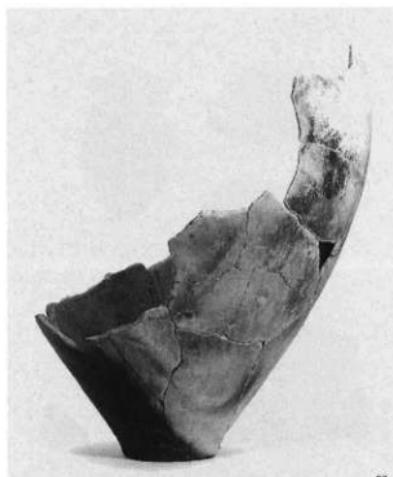


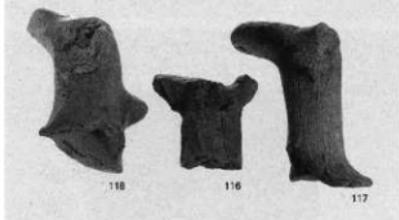
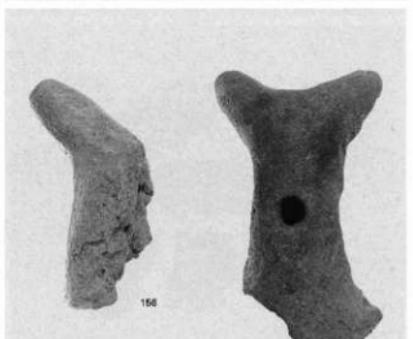
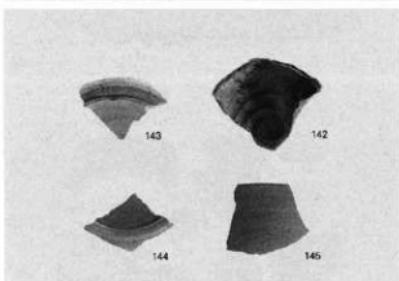
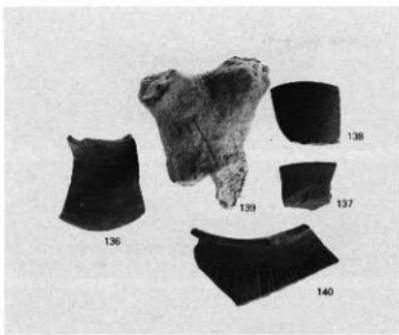
図版15 1-3区・4区 出土遺物



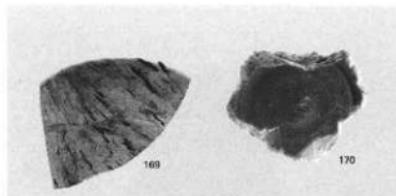


127





図版19 2区 出土遺物



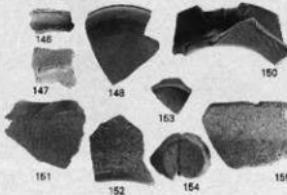
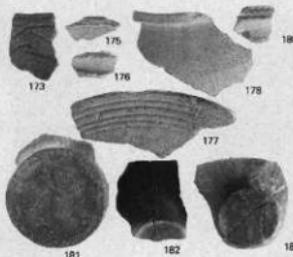
148



141



164



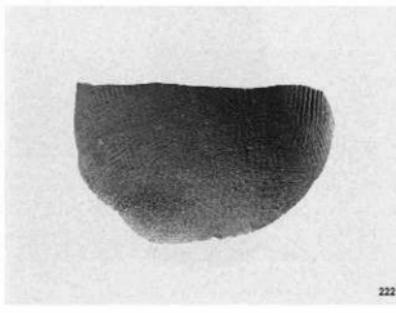
237



234



216



222



図版21 2区 出土遺物

